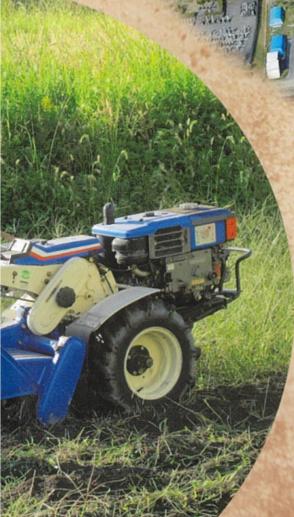
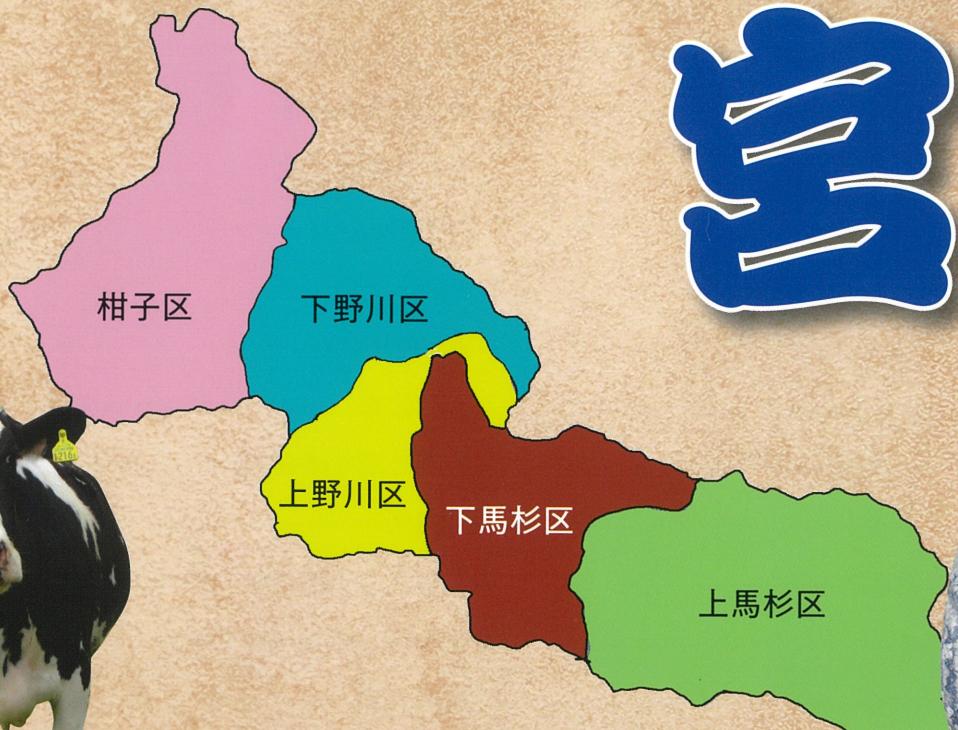


あるさと

宮



宮地区自治振興会

目 次

●「ふるさと宮」発刊に寄せて	1
●宮地区とは	2
●明治・模範村「宮村」の人と水	4
●宮村誕生・大きな出来事	5
●宮村の村是	6
●住まい	
茅葺屋根の生活	7
白熱電球の明かりで生活	8
ラジオ放送・電話の設置・当時の家族	9
結婚式	10
生活用水	11
牛との生活	12
鶏の飼育・水田の生き物	13
食生活・祭りの食卓	14
●宮のお店	15
●交通機関	16
●教 育	18
●子供たちのおやつと遊び	19
●宮村のお医者さん	20
●酪 農	21
●昔の農業	22
●養 蚕	28
●娛 楽	29
●近代化への歩み	
住まいの近代化	30
農業の近代化	34
●宮地区のあれこれ	
宮の城郭群	40
宮の社寺	42
各区の取り組みと歴史	48
祇園祭	68
●宮地区自治振興会10年の歩み	70
●懐かしい言葉・宮村役場	74
●歴史年表	75
●あとがき	78



「ふるさと宮」発刊に寄せて

宮地区自治振興会では、平成27年に「滋賀の宮村」の復刻版と現代語版の二冊を同時発刊しました。明治から大正、昭和と激動の社会の中、宮村という小さな自治体が、大波の中を進む小さな舟のごとく、波に呑まれることなくしっかりとした舵さばきで、地域の人々の安寧と、社会的成長を成し遂げた証として、誇り高き人々の歴史を宮の人々に知ってもらえたことは、地域だけでなく、多くの方からも評価を頂きました。

時は経ち、「昭和から平成に、平成から令和に」と時の流れの中で、子どもの頃の思い出や、地域の発展の歴史が忘れ去られて行く寂しさと、今ならまだ「滋賀の宮村」以降の時代を残せるのではないかと、平成27年（2015）より構想し、自治振興会において積み立てを始めました。

自分たちで歴史を探り、記憶を絞り集めてのスタートで、何度も試行錯誤を重ねながらの編集でした。当初は「宮おもしろ図鑑」（仮称）と名が付いたせいか、目標が定まらず苦労することもありました。編集委員の皆様が根気強く進めて頂いた結果ようやく発刊にいたりました。

この一冊が皆様の手に渡り、昔を懐かしんでいただき、若い世代の人との交流の機会になれば大変嬉しく思います。この本をきっかけに自分たちの家族の歴史や、地域の歴史に興味を持って頂ければ本望です。

この一冊のために、取材をさせて頂いた皆様、写真の提供を頂いた皆様、制作期間中の自治振興会の理事の皆様、市民センターの職員の皆様、そして何よりもコロナ禍のなか最後まで編集に関わってくださった編集委員の皆様に心より感謝申し上げます。

この本の行間にはない家族や自分の歴史や場面を皆様の記憶で織り込められた時が「ふるさと宮」の本当の完成だと思います。

令和3年2月

宮地区自治振興会会長

中野 和彦



宮地区とは



宮地区は甲賀市甲南町の東南部を占め、北から西は甲南中部、東は甲賀町油日、南は三重県伊賀市に接していて、柑子、野川、下馬杉、上馬杉の4大字によって形成されています。古琵琶湖層群からなる甲南丘陵を、榎川支流の浅野川などが樹枝状に開析した地域です。

浅野川に沿って、県道134号上馬杉野尻線と県道135号上馬杉上野線が南部山間部には県道337号線柑子塩野線（その先上野川までは広域農道）が横断する。柑子丘陵地には磯尾境に沿って県道133号伊賀甲南線が伸びる。野川を南北に県道775号甲賀阿山線は、平成22年新名神甲南インターの開通により、伊賀市と甲賀市を繋ぐ主要な道路として交通量が多い。三重県境を縫うように走る東海道自然歩道は、年間を通じハイカーが見られ豊かな自然を満喫する事が出来ます。

宮村は、明治4年（1871）廃藩置県で大津県となり同年の区制施行により甲賀郡第八区に属し、翌5年には全てが滋賀県に属した。明治18年（1885）の連合戸長役場制により、野川村外3ヶ村連合戸長役場が置かれ、明治22年の町村制施行により宮村が

成立。村名はかつての新宮荘の東部分に属したことから、当初は東宮村を採用の予定であったが、西側が南山村と決めたので、宮村になりました。その後昭和18年（1943）に他村と合併し甲南町に属しました。

昭和30年代後半まで農業は專業もしくは第1種兼業農家が大半で、そのほとんどが稻作を中心とした農家でした。その他山間部を利用したお茶の栽培や養蚕業なども行われていました。その他の産業として兼業で商店や大工や屋根職人の他、上野川や上馬杉を中心に多くの配置売薬の行商が農閑期に全国に繰り出しました。

昭和40年代に入ると仕事を求めて水口や周辺の町へ徐々に就職する人が増えてきました。宮地区にも昭和40年に小学校のそばに「大甲ニット」の工場が進出して女性の雇用が生まれました。

その後昭和47年頃から柑子に工業団地が平成15年には、甲南フロンティアパークが開発され、市内でも有数の工業地域になりました。又、新名神の開通と甲南インターチェンジが開設され、ますます開発が見込まれます。

- ・宮地区的産業は、かつては水稻を中心とする農業が中心でした。
- ・この地域の土壤は、古琵琶湖の底に積もった細かい土が押し固められ、その後に隆起（古琵琶湖層群）してできたズニンやズニンコなどと呼ばれる粘土層でできています。
- ・この粘土質の水田は、日照りが続くと深いひび割れができ、水が漏れてしまい稻作に大きな被害をもたらしました。このため、この地の人々は長い年月をかけて、田んぼに一年を通して水を溜めておく湿田農耕を生み、米作りに不利な条件を克服してきました。
- ・宮村は、約90年前の昭和初期、世界恐慌の影響による農村不況の中、全国に先駆けて経済更生運動の指定村となり、村民の総力を結集して農業の多角的経営、人づくり運動等に粘り強く取り組んだ結果、模範村として表彰をうけるなど、「滋賀の宮村」は、全国に知れ渡りました。

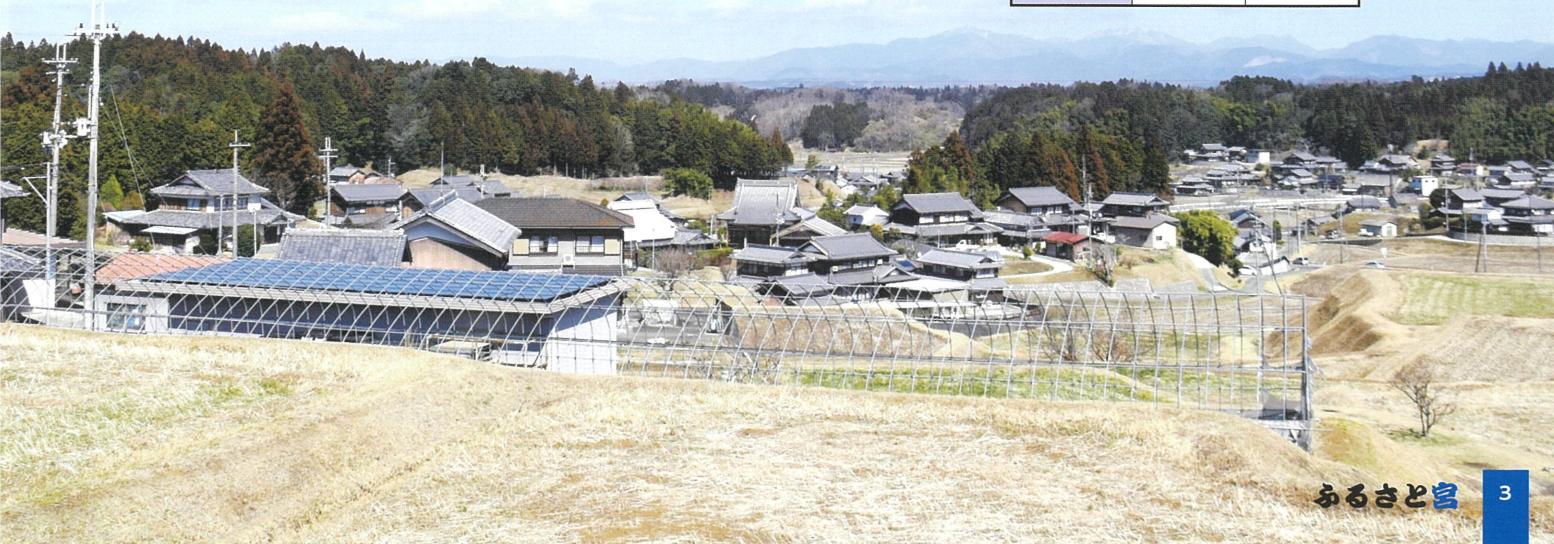
・湿田は乾田に比べて農作業に大変な努力を要しました。深い泥に足を取られて身動きが取りにくく、田打ち、代掻き、田植から刈り取り、稲架けまでの一連の作業に苦労を伴ったほか、農閑期には水漏れ防止のための畔掘り、床張り等の重労働も必要でした。（湿田農耕に関する詳しい資料は、第三小学校の旧講堂を移築した「甲南ふれあいの館」に展示、保管されています。）



宮村の所帯数と人口

	明治11年		昭和40年		平成28年	
	所帯数	人口	所帯数	人口	所帯数	人口
柑子	80	483	70	339	78	255
下野川	99	487	47	230	98	331
上野川			44	194		
下馬杉	49	266	48	230	45	126
上馬杉	75	385	70	307	57	159
	303	1,621	279	1,300	278	871

	所帯数	人口
明治 11 年	303	1,621
明治 14 年	299	1,575
明治 17 年	304	1,644
明治 20 年	312	1,701
明治 29 年	310	1,707
明治 33 年	316	1,747
明治 38 年	302	1,789
明治 43 年	293	1,626
大正 4 年	292	1,644
大正 9 年	307	1,564
大正 14 年	281	1,523
昭和 5 年	282	1,534
昭和 10 年	280	1,508
昭和 15 年	273	1,495



明治・模範村「宮村」の人と水

滋賀県甲賀郡旧宮村（現在の甲南町南部）は、低い丘陵が連なる山間の小さな村である。ここは大昔、古琵琶湖の底であったところが隆起したために、水を保つような山もなく、そこから流れる川もなく、田の水源は谷頭にある小さな溜池の水だけでした。つまりすべての田の用水を天水に頼るという天候に左右されやすい稻作地域です。

その上この地域の土壤は、古琵琶湖の堆積土であり、しかも宮村周辺は特殊重粘土から成るために、少しの旱魃でも田面に亀裂が入って減収となつた。また、旱魃（かんばつ）に会つて田に入ってしまった亀裂は二度と元には戻らず、「畦堀り」や「床張り」などの重労働を伴う田の復旧作業が必要でした。このような旱魃の被害を最小限にするために、この地域の田はすべて年中の滞水田にしておかなければならなかつた。そのため、この地の農作業は、日常の

農作業でも他の地域に比べて、特別な技術と労力を必要とするもののが多かつた。

このような厳しい水環境と土壤条件を克服してきた、この地の人々からの農作業や生活の工夫を調査する途中で、ある農家の方から一冊の農業日誌を見せていただいた。それは昭和10年代の数年間にわたつた毎日の農作業の記録です。

山間の小さな村の、ごく平均的な農民（当時40歳）が書いた日誌の内容の歴史的な価値とともに、この著者の日々の暮らしの中での地に付いた知性と教養の高さに目を見張つた。この日誌を読んで、細かくめんどうな手仕事の繰り返しの中で、きちんと米を収穫して一年が終わっていく昔の農民の生活の一部始終を知り、また昔の村に暮らす人々の、地域に根付いた生活風景と知恵がありました。

表1 明治42年度の人口

	本籍人口（人）		戸数（戸）	村の外へ出ている人数（人）		村へ入ってきた 人数（人）	1戸当りの村の外へ出ている人数（人）	
	男	女		男	女		男	女
宮村	1046	1003	294	396 (*2)	75 (*1)	1.4		
龍池村	2063	2046	615	402	276	—	0.65	0.45

(*1) この内訳は、農業14人、工業5人、商業5人、僧侶3人。教員、巡回4人、下女7人、工女21人、看護婦、車夫4人、無職業12人となっている。

(*2) この内訳は、商業216人、工業40人、農業35人、学生9人、教員5人、軍人6人、弁護士、会社員、医師、僧侶11人、その他無職業のもの74人

また*1、*2の無職業のものは一家で移動した人たちで、夜逃げのような状態の人たちである。

表2 田1反(10a)からとれる生産高

	宮 村				龍 池 村			
	数量	単位	単価(円)	金額(円)	数量	単位	単価(円)	金額(円)
産米	2.40	石	(180ℓ)	11.7	28.08	2.30	石	(180ℓ)
屑米	0.20	石	(180ℓ)	5.0	1	0.20	石	(180ℓ)
糞	117.00	束	(稻12たば)	0.011	1.287	100.00	束	(稻12たば)
畦豆	0.03	石	(180ℓ)	8.0	0.24	0.02	石	(180ℓ)
粉糠	12.00	貫	(3.75kg)	0.01	0.12	10.00	貫	(3.75kg)
合 計				30.727	合 計			
								49.57

表3 自小作別農家戸数（カッコ内は%を示す）

	自作	自小作	少作
宮村	93 (36.2)	166 (45.1)	48 (18.7)
龍池村	170 (34.4)	243 (49.2)	81 (16.4)
伴谷村	202 (43.5)	235 (50.7)	27 (5.8)
県 (1899)	(35.4)	(38.4)	(26.2)
全国 (1908)	(33.3)	(39.1)	(27.6)

(*1) 宮村、伴谷村は各「村是」より。

表4 どじょうの産出量

	産出量(貫目)	単価(円)(1貫目につき)
宮村	965	4.000
龍池村	155	3.200

表5 クマシの産出量(肥土)

	産出量(坪)	単価(円/坪)	田の面積(町)
宮村	2257	3.20	225.7
龍池村	2000	3.50	407.3

宮村誕生

昔より各々大字単位を村と呼び、町役場の下に数村のまとめに戸長役場があった。各村が合併してある程度の規模になるように明治21年に町村制実施令が公布され、同22年発足する運びになりました。新宮荘を中心として龍法師村は新治（新宮村と倉治村はすでに合併していた）野田、野尻、磯尾一つのグループとして新宮荘の西にあるので西宮村を考えたが、しかし南杣グループは山上が北杣村につき、杉谷、市原、塩野と新治は入会権と水利上の問題があり杉谷の方に合併して北杣に対し南杣村と

した。当地の役場では、西宮村に対し東側の故に東宮村を考えた。池田は滝、大原市場との関係を重視していたが、地続き等の関係で最終的に龍法師グループに加わり龍法師の龍、池田の池をあわせ龍池村とした。そこで西宮村が消えたので東宮村が単に宮村としました。

宮村では上馬杉は大原市場との繋がりが深いこともあります。合併後も、そちらから誘いがあれば分村する条件がついていた記録があります。

宮村誕生・大きな出来事

大きな出来事

大地震

大地震は、嘉永7年（1854）7月9日に始まり（同年11月より安政となる）安政時代6年間で関東大震災（大正12年9月1日）級のものが13回もありました。調べるうちに伊賀地震と判り震度8.4と記録されています。上野市より8kmも離れた月ヶ瀬村石打の一百姓の人が日記に、あぶが喰いついた馬の腹のように地面がゆれたと、また、「地は焙烙（ほうろく）

く）の中で豆を炒るとき両手でゆするが如きなり」と書いてあります。昼午の刻（正午）前で大ゆれ、小ゆれ頻繁に一日五～六回戸外に出る。（豆を人間に例えている）始めは昼午の刻（正午）前で大ゆれ、小ゆれ頻繁に一日五～六回戸外に飛び出すとあり四日連続の日々だったそうです。

衛生環境

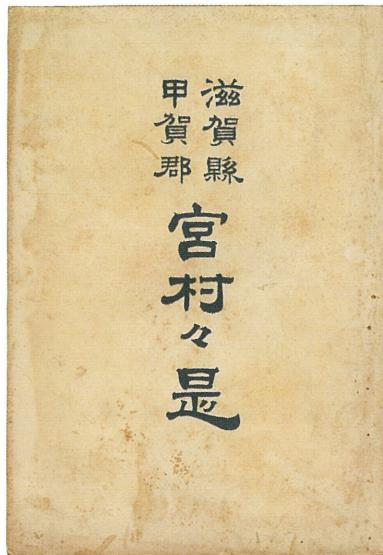
明治中期には、37万人の人が亡くなり、日清、日露の大戦の死者を上回りました。祖母の話では、しょかんぼ（流行性感冒）とんころ（コレラ、赤痢、チフス）がよくはやって恐ろしかったとのことです。上野川で毎年2人から3、4人くらいの葬式があるが、流行病で安政5年（1858）12月に同じ日に2人が亡くなられ、万延元年（1860）夏期7月に2名、9月にも2名連続して亡くなられた。その年の死者7名、文政2年（1819）冬季3名、8月に連続4名、計10名が亡くなっています。夏は伝染病で冬は流行性感冒らしい。明治元年から3年は普通の年の2倍以上の葬式があったそうです。

柑子にあった望月医院の先祖は望月城の城主で末裔が代々医者をしておられ医師望月重隆氏は嘉永2年（1849）この地に茶を植えられ焙製して同好者に分与したとの記録が残っています。昔は茶は薬だったと聞きます。明治、大正、昭和の望月修先生は闡明学校を卒業し最後に東京大学に進まれ眼科専門で名声が高く遠方より来院される方が多かったそうです。

宮村の村是

明治43年「郡衙指示書類」は町村是設定について指示訓令を発した。明治以後我国資本主義のいちじるしい拡大は都市の諸工業を繁栄させましたが、農村を疲弊させ近代日本は繁栄と貧困の跛行的な歩みの中にあった。農村を繁栄させるには村の現状を正確に把握し、将来の発展方向を見定めた長期計画の樹立が要請された。明治末期から大正初期にかけて各町村単位に町村是の設定

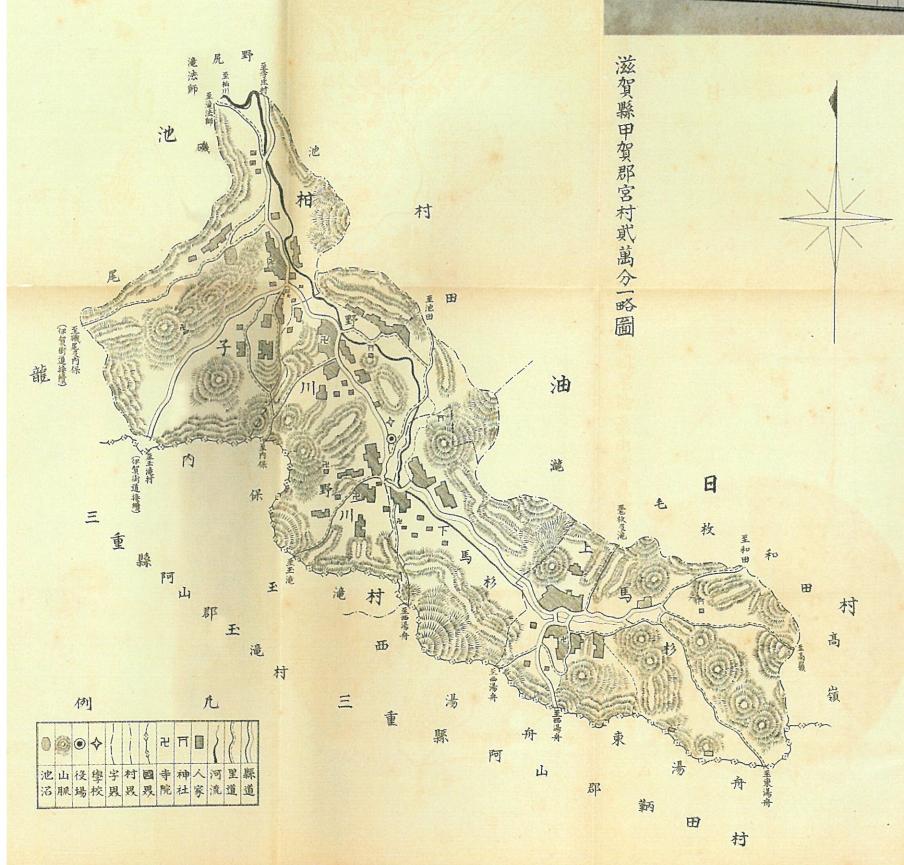
宮村の村是



「宮村の天然資源はまことに貧弱であるが、村民の団結によって村の現状をつぶさに分析し、学理を産業開発の面に高度に適用して産業の教育化、教育の産業化、すなわち教育と産業の結合によって村民が幸福になる道を開拓していく」というのが宮村村是の内容です。

第二號	旗	(三五)	字彌留御宿御宿ヨリ字彌谷口第 字彌三郎
第三號	旗	(三五)	字室井松第 室井七人余松室井ヨリ
第四號	旗	(三五)	字小山源道 小山田源道下タケダ大野町川上室井
第五號	旗	(三五)	字安藤延道 安藤延道ノ第第四號ニシム
第六號	旗	(三五)	字山田内第
第七號	旗	(三五)	字谷第第四百四十五番地ヨリ油日村字瀧原ニエム
第八號	旗	(三五)	字牛浦四百一十九番地ヨリ油日村字瀧原ニエム
(大學上等形)			
第一號	旗	古畫	西吉見道ノ字新間宇谷谷ノヲト賀伊國湯守室ノ
第二號	旗	八重	第號柳千八重番地ヨリ字國守下野延至ヘ
第三號	旗	西(?)	第號柳千八百四十六番地ヨリ字國守下野延至ヘ
第四號	旗	(三五)	第號柳千八百七番地ヨリ字國守下野延至ヘ
第五號	旗	(三五)	第號柳千八百八十六番地ヨリ字國守下野延至ヘ
第六號	旗	(三五)	第號柳千八百九十五番地ヨリ字國守下野延至ヘ
第七號		古畫	西吉見道ノ字新間宇谷谷ノヲト賀伊國湯守室ノ
第八號		古畫	字國守下野延至ヘ
第九號		古畫	字國守下野延至ヘ
第十號		古畫	字國守下野延至ヘ
第十一號		古畫	字國守下野延至ヘ
第十二號		古畫	第一號千八百番地ヨリ伊賀郡西因房ニ至ル
一、東		賀道	(賀道)
二、伊賀道			(賀道)
大字守		大字守	大字守一連通販八尺有且且至本村ノ爲カ主義造ハ越木本道依
リ		リ	用俗語云出スルモノトス
東伊賀守太上守居ヨリ		東伊賀守太上守居ヨリ	分賀シ重義山郡田村田村字西御舟海邊ズ
(明治三十九年越工費六百石御置奉來口下御勤修造立タ)			

道路名一覧



宮村の地図

茅葺屋根の生活

茅葺屋根の生活



昭和初期までほとんどの家は、茅葺屋根の家で生活をしていました。20年から25年ごとに、新しい茅で屋根の葺き替えが必要で、近所の方と親戚の方に手伝ってもらい綺麗な茅葺屋根にしていました。屋根の葺き替えは、一大仕事で誰かわからないほど顔が真っ黒になり大変でした。(近所同士の助け合いを結(ゆい)といいます)



当時のかまど（おくどさん）の燃料は、山の雑木を切って柴と割木を冬の間に作っておいて台所とか風呂の燃料にしていました。又燃やした後のオキ（火）に水をかけて消し炭をつくり、コンロの燃料に使っていました。

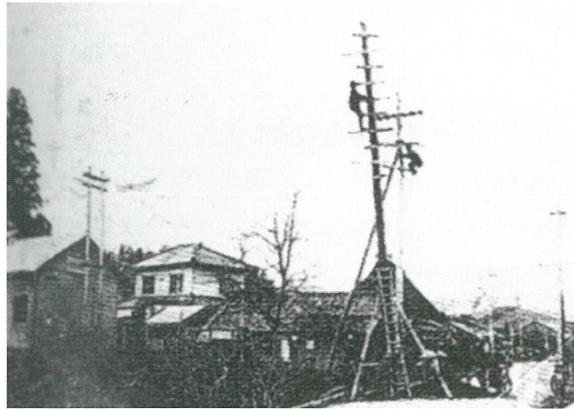


消し炭も立派な燃料になるので大切につかっていました。



食事はみんな揃って頂きますと手を合わせてから美味しくいただきました。
写真のようにあまり御馳走はなかったです。

白熱電球の明かりで生活



甲賀郡では大正3年（1914）、信楽町大戸（だいど）川中流に京都電灯株式会社が計画した大鳥居発電所が建設され、営業運転を開始したことが「大鳥居発電所80周年記念誌」に記されています。大鳥居発電所とは別に深川発電所も開業され、現甲南町の深川にはじめて電灯がついたのもこの年です。杣川橋北詰の浅間大杉付近にあったこの発電所は、重油を燃料とする発動機に幅広ベルトをかけて回して電気をおこすもので、発動機の爆発音がボーン、ボーンと大きな音を響かせていたのを覚えている古老もいます。

当時陶器や木炭を運ぶため信楽—深川間を走っていたロープウエイの支柱を利用して送電されていたというから驚きです。またこれと同時に、新しく信楽水力発電株式会社系列の深川変電所が発電所の傍らに建てられました。



それまでの灯油を使った照明は、光度が低く、取り扱いも不便なものでした。特に、油煙で黒くなつた火屋（ほや）ランプのガラスの筒の内側をきれいにふき取るのが大変だったようです。

電気が利用できるようになったといっても大正初期はほとんどが一家一灯、しかも夜間送電のみでした。しかし、スイッチひとつで明るい照明が得られ、手間も危険も少なくなったのですから、人々は文明の利器のありがたみを身にしみて感じたことでしょう。



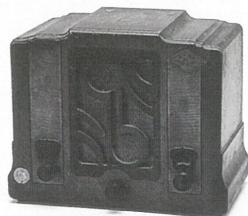
大正初期の家庭で使われていた裸電球の明るさは、5蜀、10蜀、16蜀、25蜀以上でしたが平均に使用されていた16蜀の明るさは、白熱電球20W程度のもので、現在の蛍光灯7Wぐらいの明るさだと考えられます。



ラジオ放送/電話の設置



当時は、電波の状態が悪くて聞き取りにくいときがあり音量を上げて聞いていました。



昭和初期のラジオは選局が出来ないラジオでした。



昭和20年代のラジオは選局が出来ました。



当時の電話機は壁に取りつけた箱形の磁石式で、箱の右側のハンドルをグルグル回し、交換局（郵便局）につないでから相手の番号を呼んでしばらく待つと、ベルが鳴って相手と話せるというものでした。市外通話など、遠方の相手を呼び出すときは長時間待たされることも少なくありませんでした。また、電話機の数が少なかったので呼び出し電話も多く、遠い家や、雨降りの日、寒い夜など呼び出す側の苦労は大変なもので、地域によってはスピーカーを使って呼び出すところもありました。

甲南町での歴史は村に数台というところからはじまっています。昭和35年に宮地区団体加入電話が開通しました。

当時の家族



乳母車は母の実家から贈られました 昭和16年頃



縁先の家族写真 昭和32年頃

結婚式



昭和35年頃 嫁ぎ先の家で結婚式が行われました

江戸時代になると仲人制度が誕生しました。仲人がお互いを引き合させる見合いが始まったのもこの時代です。家と家の結びつきという考え方方が強くなり、結納も行われるようになりました。結婚する前に、婿の家から嫁の家へ結納品と目録が贈られました。

嫁の家からはそのお返しとして引き出物を贈るのが習わしで、タンス、文房具、化粧道具、料理道具等、嫁入り道具を婿の家に届けました。結婚式当日花嫁はタクシーで花婿の家に向かい、ご両家の皆様で結婚式が行われました。その様子をご近所の皆様が沢山見に来られ賑やかでした。花嫁の「道具入れ」、花嫁の「嫁入り」、親戚縁者へのお披露目「祝言」の三つが行事として定着していましたが、現在は面影もありません。



結婚式の様子



給仕による踊り

生活用水

水道のなかったころ、山からわき出て来る水がきれいだったので、取り水や井戸水を使っていました。井戸の水は水温が一定で、夏には冷水のように、冬には温水のように感じるので人々の水仕事の辛さを和らげてくれました。飲み水にするときには、一度わかしてから使いました。ふろの水入れは子供の仕事で井戸水をバケツに入れて何ばいも運ばなければならないので大変でした。



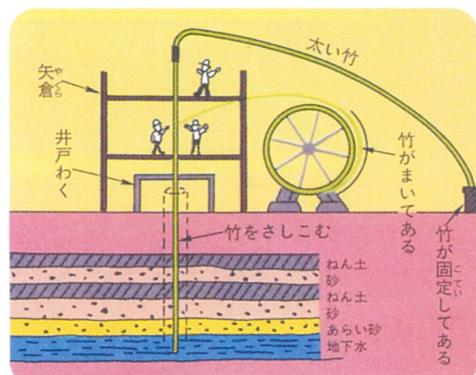
つるべ井戸の水くみ仕事



手押しポンプ

生活用水

ドッコイショ（ドッコンショ）は水道のなかった昔、井戸水があまり出なかった地域や、水にかな気が多い地域では、「ドッコイショ」といって、約70メートルほど地面をほり、地下水をくみあげる工夫をしていました。



ドッコイショ（ドッコンショ）のしくみ



ドッコイショ（ドッコンショ）は家事、洗濯を始め、野菜の水洗い、水やりなど利用頻度が沢山ありました。



現在も使用されているドッコイショです（ドッコンショです）

かな気

鉄の成分の事。かな気の多い水は洗濯や水やりに使えるが、鉄の味がするので飲み水には使えませんでした。

牛との生活

牛との生活

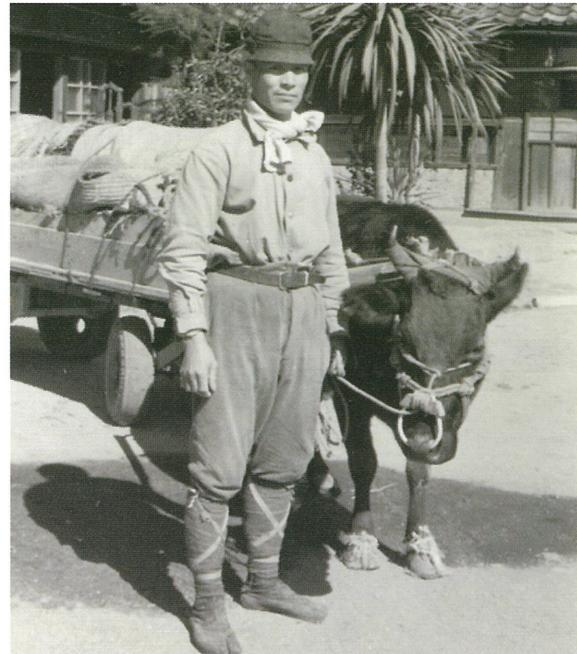


農家の住宅は、茅葺き屋根が多く玄関の左右どちらかに牛小屋がありました。農民生活の中で牛は大切に育てられていました。



牛を使って代掻き作業しています

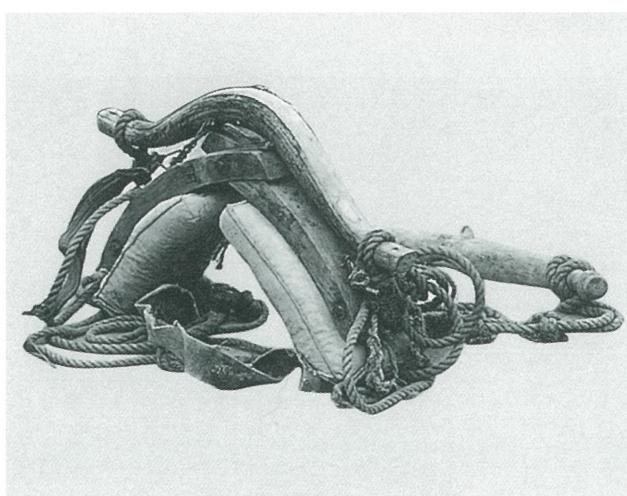
大正末期頃からは家畜も労力として利用され田起こし(カラスキ)代掻き、牛車による農作物などの運搬等省力化に欠かせない家畜でした。



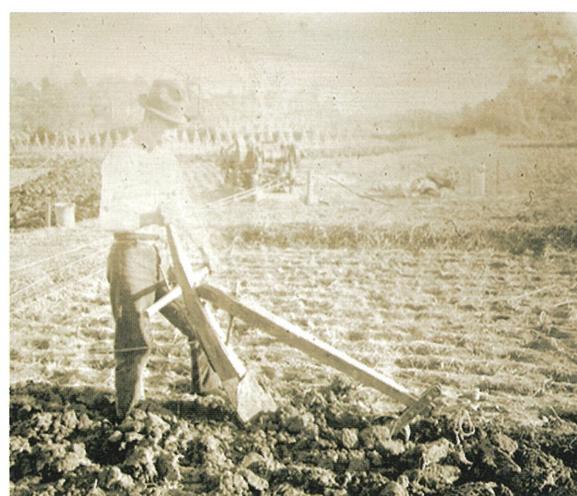
重量物の運搬に牛車を使っていました



代掻き(水田を平らにする道具です)



牛の鞍(牛の背中に取り付けます)



カラスキ(牛で田起こしの時に使います)

鶏の飼育

卵は、食物繊維、ビタミンC以外の栄養素をすべて含んでいるため「完全栄養食品」とも言われアミノ酸、ビタミン、ミネラルがバランス良く含まれているので、農家の大切な栄養食品でした。又、病気見舞や贈答品にも使われたので大切に飼育されていました。朝の卵取りは子供の仕事で楽しみでした。



鶏の散歩



家の近くの鶏小屋風景



卵を使った料理

水田の生き物

圃場整備までの水田には年中水があったので小魚や貝類の生き物が沢山いました。水田の水戸や小川にはフナやモロコ、たまにウナギが釣れることもあり、魚釣りは子供たちの楽しみの遊びでした。



ドジョウ



モロコ



メダカ



フナ



タニシ

食生活

昭和時代でも戦中戦後は食料不足で、この時代の献立はかなり貧しく、戦前の食事内容にもどったのは昭和30年頃でした。昭和15年の「婦人の友」にのっていた一日の献立です。

- 朝 ご飯、ほうれん草入り味噌汁、小魚の佃煮、たくわん三切れ
 - 昼 ご飯、茶碗蒸し、キャベツ和え、つけもの、りんご一個
 - 夜 ご飯、ほうれん草のおひたし、鰯焼き、つけもの、羊羹
- ご飯は朝日晚、三杯と書いてあります。



どじょうたたきは木綿針を15本程度並べて半田付けしています



水田にいるどじょう、たにしも貴重なたんぱく源でした。夜になると松明（たいまつ）やカーバイトで水面を照らして寝ているどじょうを、どじょうたたきで取っていました。

どじょうの田楽、かば焼きはとっても美味しいかったです。

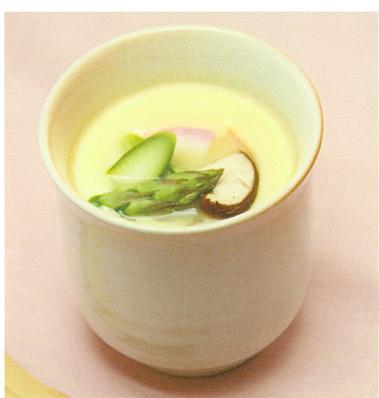
祭りの食卓

日常の食事は貧しかったですが、正月と祭りにはかしわ料理（かしわのすき焼き）を美味しくいただきました。（牛肉のすき焼き等は高価で手が届きませんでした。）

また、茶碗蒸し、ばら寿司も祭りには欠かせない料理です。たまに刺身があるのでそれも楽しみの料理でした。



ばら寿司



茶碗蒸し



かしわのすき焼き

宮のお店

● 昭和から令和まで営業しているお店

1	ひかりテンキ	電気製品	柏子
2	べんべん窯	信楽焼	柏子
3	家庭電気サービス	電気製品・設備	上野川
4	△中野貴栄堂薬品	置き薬	上野川
5	藤田産業	建設・土木	下馬杉
6	松井瓦店	瓦施工	下馬杉
7	ラボ輝	歯科技工所	上馬杉



● 昭和から平成にあつたお店

1	魚 清	魚・食料品	柏子
2	ふじや	お菓子	柏子
3	岡崎自転車店	自転車	柏子
4	辻 美容室	美容院	柏子
5	魚 寅	魚・食料品	上野川
6	農協スーパー	肉・食料品	上野川
7	松井商店	菓子・文具	上野川
8	北田吳服店	吳服・衣料品	上野川
9	増田吳服店	吳服・衣料品	上野川
10	魚 次	魚・食料品	上野川
11	保田薬店	医薬品・小間物	下馬杉
12	奥畠酒店	酒	下馬杉
13	かねまる商店	お菓子	下馬杉
14	井ノ口酒店	酒	上馬杉
15	△ ヤマカ	魚・食料品	上馬杉
16	丸 仙	お菓子	上馬杉
17	森田商店	お菓子・氷菓子	上馬杉

● 平成から令和に新規開業したお店

1	甲南へらの池	ヘラブナ釣り堀り	柏子
2	ウルー ウール	パン製造販売	下野川
3	オクダオートメンテナンス	自動車・修理	下野川
4	山ねこハウス	小物・雑貨	下野川
5	マンマ・ミーア	ケーキ・カフェ	上野川
6	HANBEY	小物・雑貨	上野川
7	和来や	田舎力フェ	上野川
8	宮ベリ一	観光ブルーベリー園	上野川
9	ほんわか整体	整 体	上野川
10	手打ちソバいしばし	手打ちソバ	上馬杉



配置箱(置き薬)

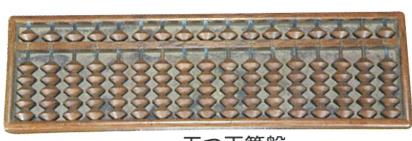


引き札



大福帳

矢立



五つ玉算盤

HANBEYさん(旧増田吳服店)には明治時代以前からの貴重な商売の道具などが今も残っています。これらはその一部です。

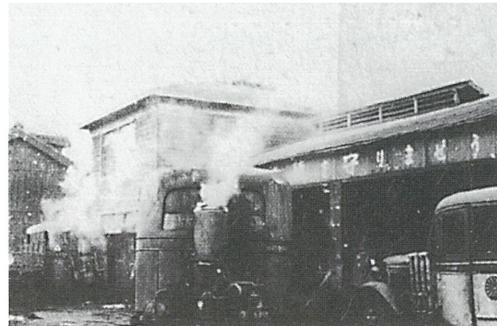
交通機関

バスが開通するまでは、自転車が唯一の乗り物で移動には欠かせませんでした。

昭和35年には寺庄駅から上野川間にバスが開通して、移動するのも便利になりました。上馬杉まで開通したのは数年後で、玉瀧→上馬杉→下馬杉→上野川→下野川→柑子→寺庄駅のルートができ、地域の交通の要となり通勤客の利用も多く草津線と連絡されて大変便利になった時代でした。



当時の自転車



木炭バスも走っていました



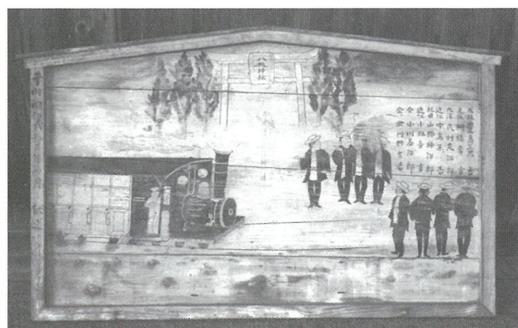
当時のポンネットバス

通勤の時間帯は、いつでも満員で身動きができない程の乗客でした。当時は、一日6~7往復でした。

英 金 貨		支 手 駅		表 時 刻 表		列 車 列		草 津 線		三 雲 線	
從	石	從	草	時	刻	車	列	時	刻	車	列
三	雲	三	雲	一	二	三	四	一	二	三	四
鐵	道	鐵	道	二	三	四	五	二	三	四	五
會	社	會	社	三	四	五	六	三	四	五	六
開	業	開	業	四	五	六	七	四	五	六	七
廣	告	廣	告	五	六	七	八	五	六	七	八
關西鐵道會社開業廣告											

草津三雲間の時刻表

鉄道の開通は明治22年12月25日 草津・三雲間が開通しました、草津駅発 朝7時5分の一番から夕方6時25分発の最終まで、一日6往復の列車が運行され旅客は一列車あたりわずか20人程度だったと記録にあります。翌23年2月19日には、残りの三雲・柘植間20.58キロメートルも開通し深川駅と柘植駅が開業しました。運行回数はやはり一日6往復でした。甲賀郡（甲賀市）における鉄道の開通は全国的に見てもかなり早い時期でした。

関西鉄道（草津線）の記念絵馬
(明治23年7月:森尻八坂神社)



関西鉄道会社の蒸気機関車



○旅客

乗車人数: 508,077人 降車人数: 494,971人

○貨物

発送トン数: 2,460トン

発送貨物(発送車数484車)の内訳

- ・米 1,255トン
- ・木材 273トン
- ・わら工品 200トン
- ・麦類105トン
- ・その他(セメント・肥料・鉄屑など) 各50トン以下

到着トン数: 4,778トン

到着貨物(到着車数482車)の内訳

- ・肥料 1,141トン
- ・セメント 463トン
- ・石炭 285トン
- ・木材(パルプ材) 170トン
- ・石灰類 69トン
- ・砂利 59トン
- ・その他(薪炭・石油・アルコール類など) 各50トン以下

※この数字は当時所管の天王寺鉄道局管内で、約300駅中100番目くらいの成績であったという

昭和30年度の深川駅の輸送状況

甲南町の表看板である深川駅の駅名を開通以来66年ぶりに昭和31年4月に甲南駅に変更されました。



蒸気機関車最後の雄姿(甲南駅)

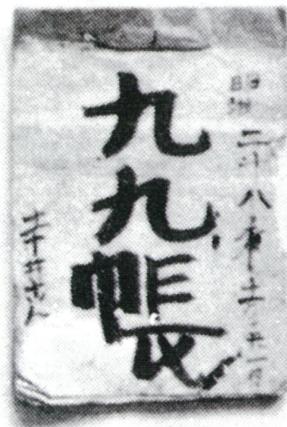


昭和32年12月から草津線にディーゼル機関車が運転開始、その頃急増した通勤客を中心に寺庄駅の設置要望が実り、昭和34年12月25日寺庄駅が開設され、宮地区の方のバス通勤が寺庄駅を利用するようになりとても便利になりました。昭和55年3月3日草津線は電化になり、6両編成の電車が走るようになって通勤の便が更に向上了しました。

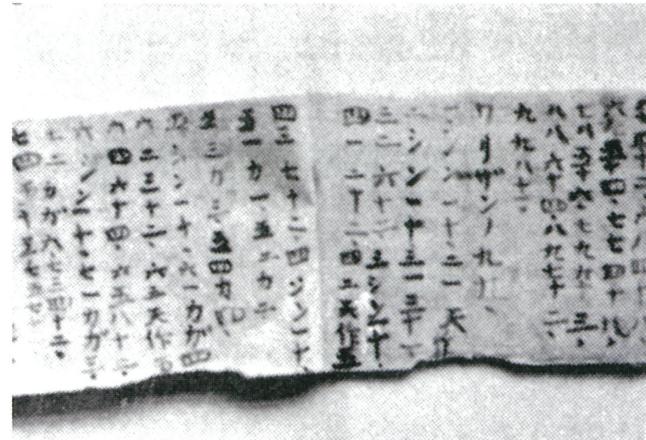
教 育

甲南第三小学校は明治41年10月7日に宮村立宮尋常小学校として創立しました。旧の講堂は昭和6年に宮の大工さんによって建設されました。当時の授業は算数、国語、理科が主で、各学年の児童数は35名ほどで、教室が狭く身動きできないくらいでしたが賑やかで元気あふれる小学校でした。当時の冬は厳しく11月には田んぼに氷が張り通学や授業中も寒くて大変な時代でした。

教 育



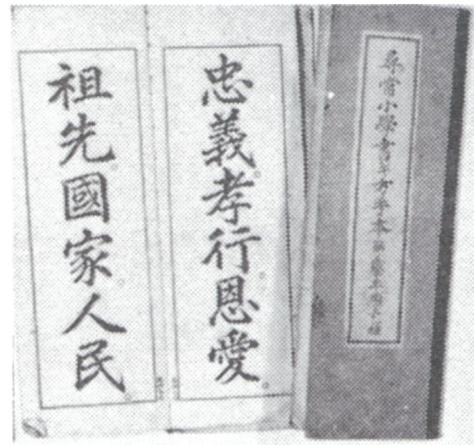
当時の小学校2年生頃の九九帳



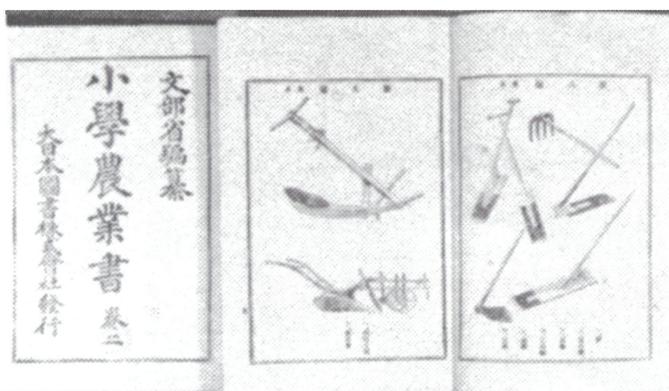
「二一天作の五」の割り算の九九が教えられていました。



第三小学校旧校舎玄関



尋常小学校書き方手本



大正元年小学農業書



通学風景

子供たちのおやつと遊び

学校からおなかをすかせて帰る子供たちの楽しみは、今も昔もおやつでしょう。といってもいばらだんごやよもぎ餅を口にできるのは稀で、子供たちは、たいていの日はカバンを置くのも憚ただしく里山を走り回っていろいろなおやつを見つけました。

春になればたこな(ii)に塩をつけて食べ、夏が近づくと野いちご、桑の実、なつめ、ぐみ、また畑にできる野菜や果物もみずみずしいおやつでした。きゅうり、にんじん、そら豆、大根、なんば(iii)、トマト、すいか、まくわなど。秋にはさつまいも、柿、栗、あけびも実り、まさに自然の恵みでいっぱいでした。冬は火鉢を囲んで自家製のかきもちを焼いたり、あられを煎ったり、カルメトウを作ったり、はったい粉を練って食べたりしました。

里山はおやつの宝庫であるとともに、子供たちにとって遊びのワンダーランドでした。

(ii) いたどり。タデ科の多年生植物 (iii) とうもろこし

『遊びのようす』



「さで」を使って川魚捕り。「もんどり」でどじょう捕り



どんぐりでこまを
つくり当て合い



新聞紙で風船、ぱっかん、
兜帽子



たけわ
竹輪回し



箱スキー

新聞紙で落下傘

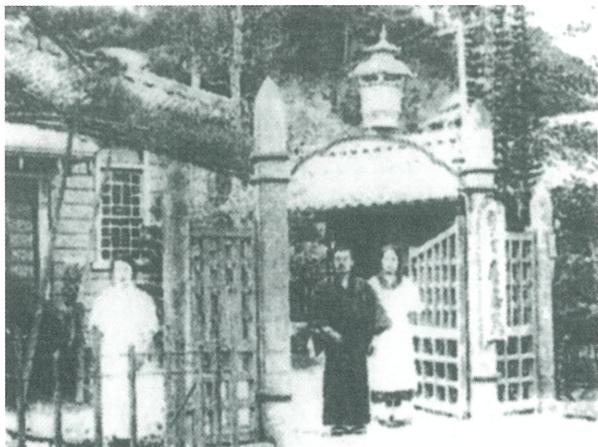
宮村のお医者さん

●野川診療所

警察官の住宅が終戦後診療所となり、深川病院のお医者さんが交代で来られ、また隱岐先生も来られていました。その後昭和28年より望月悦子先生と川村貞子さん、北田昌さんが頑張ってこられました。地域医療には充分な貢献をしてもらっていました。新しい診療所は昭和57年7月に現在地に移転され甲南診療所になりましたが、利用される方が少なく平成29年9月12日を最終診療日とし、9月末日を以て閉院になりました。



●望月医院



望月修は明治7年11月7日、漢方医望月良斎の長男として柑子村に生れた。代々医術をもって近隣にきこえ、草深い農村での唯一の医家として村民敬慕の家柄に成人した。明治14年甲賀郡第四十五小学区野川村（福泉寺）闡明学校に入学し、卒業後父のすすめに従って東京へ遊学し、東京ドイツ語協会学校を経て明治31年7月第一高等学校を卒え、同35年12月東京帝大医科大学を卒業した。

当時農村では眼病の流行と外傷による眼疾の多いのに心を痛め、卒業すると直ちに大阪山県眼科にて眼科専門の研究に精魄をうちこんだ。たまたま父良斎の死にあい、郷党の懇請に応えて明治37年12月柑子に眼科小児科専門医として望月医療病院を設立、漢方医が一般であった当時、進歩した西洋近代医学の草分け時代に卓越した医術と高潔な人格は、家憲として「医は仁術なり」とかかげられた診察室の懸額に示す通り、身をもって農村での医療普及に尽力されました。

●開田医院

開田八十二郎は安政3年（1856）、上馬杉に開田朔馬の長男として生れた。開田家は代々医者であり、彼はその7代目に当る。父朔馬は甲賀の郷士として岸和田藩に仕えていた。

彼は父の住んでいた岸和田下屋敷から、大阪大学の前身高安塾に通い、25歳で郷里上馬杉に帰り、父朔馬の後を継いで医業に従事した。とくに産科を専攻したが技倅円熟、付近に難産のあった時は必ず乞われて往診し、懇切丁寧に患者に接し、名医ぶりを発揮したのでその名は遠くまで传わり、彼を慕う患者は日ましに多くなりました。

医は仁術也、彼は夜間や風雨をもいとわず、遠く土山、大原、油日、佐山方面まで乞われるままにこころよく往診した。当時他に交通の便はなく馬に乗るか籠を利用していました。



酪農

宮村には中規模酪農家と、小規模酪農家、そして個人の酪農家がありました。中規模、小規模の酪農家は牛乳の販売で生計を立てていました。一方個人の酪農家は1~2頭の乳牛を飼育して牛乳の自家消費と近所の方に販売をしていました。



当時の牛舎の様子



牧場の草を食べて元気です。



昔は一頭ずつ手で生乳を絞っていました。
たくさんの乳牛がいると朝早くから作業にかかり出荷に間に合わせていました。

昔の農業

●溜池

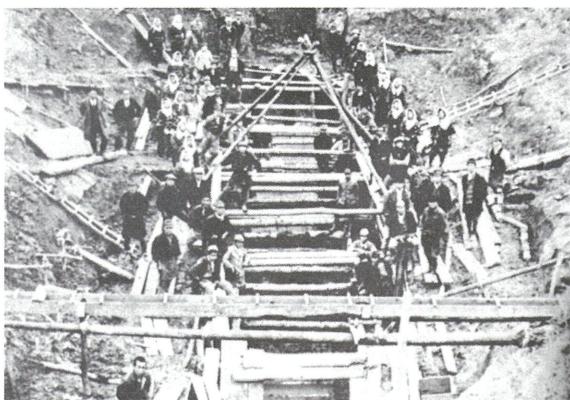
甲南町域の丘陵地域は、全国でも稀な干害地域で、特にこの地域特有の重粘土に起因する旱魃（かんばつ）被害は、稻の生育が阻（はば）まれるという直接的なものにとどまらず、乾燥によって田の畔や田底に亀裂が入り、田が破壊されるという二次的な被害が多くありました。

旱魃によって破壊された田は、いったん乾燥によってできたひび割れをすべて取り除き、新しく床を作り直すという「土木作業」によって修復しなければならなかった。それは非常に重労働で、専門的な技術を要した上に、すべての農作業を終えた晚秋以降の厳しい気候のもと、翌年の田植えまでに完了させるという期限があり、しかも大変な労力と費用を要して田の復旧をやり終えても、といってみれば田が元どおりになるだけという疲労感を伴うものでした。

又、山が低いということは蓄える水が少なく、田圃の近くに小さくて浅い皿池が多くあってその下の棚田を守っていました。当時の宮村には溜池が414ヶ所もありました。大正10年から大正13年の4年に及んだ大干ばつ被害には、村民も疲弊困窮し政府より低金利貸付及び開墾助成法による救済を受けて、水田、溜池の復旧、修繕作業をすることが出来たが、昭和22年夏に70年ぶりの大旱魃に見舞われたことから、甲南、油日、鎌掛3町村を対象とする旱害恒久対策事業実施のため翌年6月松川沿岸普通水利組合が設立され溜池の新增設16か所の工事が行われました。



昭和初年頃の宮村全体がかんがい地帯でした。



野川神出池の造成工事（昭和23年頃）



土運び（土持ち）に使われたノンゴ



農業用溜池

● 畦堀り



田圃の畦が日照りで生じたひび割れがなくなる所まで、専用の畦堀り鋤で掘っていき土に水をかけながら足で踏み固めて水漏れを防止する作業でした。

● 土持ち

土持ちとは肥効を持った粘土や肥土を客土する作業である。刈草と土を交互に積み上げたクマシ土を客土にしていました。



竹橋を歩いて水田に土持ちをする様子



竹橋

土持ちに欠かせない道具が竹橋とノンゴである。竹橋は竹を細長い筏上に組んだもので、柔らかい水田の中を歩きやすくするため田の上に置いてその上をクマシ土を積んだノンゴ担って水田の中央まで行き、水田の中にクマシ土を投げ落とす作業でした。

● 粉播き



昭和40年代の保温折衷苗代作業の様子

●田打ち



田打ち作業の様子



田打ち用の鍬

田打ち用の鍬で一株、一株起こしながら田植え前の作業をしていました。

一日に何千回鍬を上下したのかわからないくらい沢山鍬を動かす重労働の作業でした。

●苗取り



田植え前の苗取り作業

●田植え



田植え作業の風景

●水替え

水田の水が少なくなると、小さな溜池から水をくみ上げていました。すべての作業が人力による作業でした。



水替え桶



水替えの様子

●稻刈り

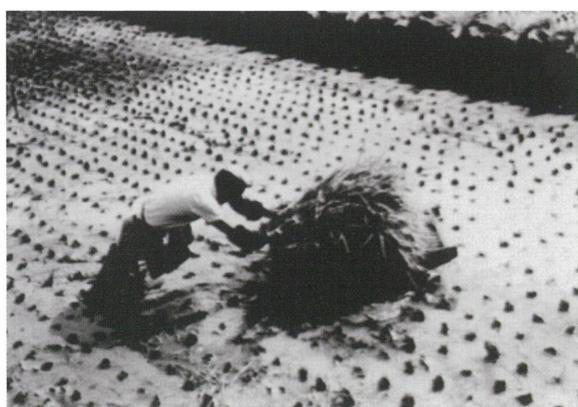


鎌を使っての稻刈り作業

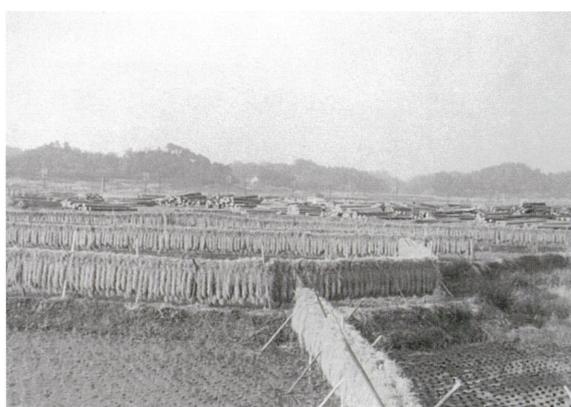
水田の中で鎌を使って一株一株刈り取っていました、10cm程度の束にして、田舟で畔まで押して行き、畔に並べて乾燥したり、稻架けにかけて乾燥していました。

うつむいた状態で刈り取りするので、腰が痛くて夕方には真直ぐに立てず、しゃがんでいました。

昭和20年代朝夕寒かった時期は焚き火で身体を暖めながら仕事をしていました。



刈り取った稻を積んだ田舟



稻架け後の風景（稻の乾燥）

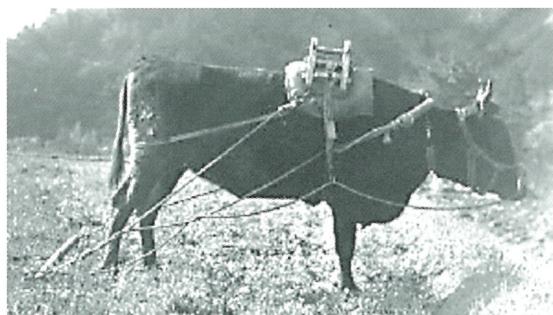
● 稲こき



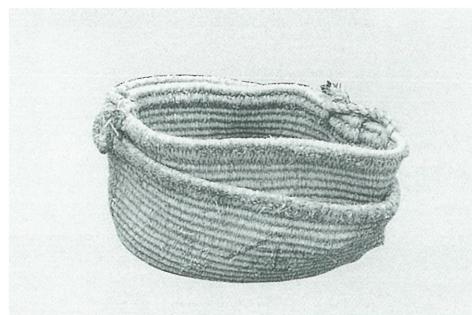
足でドラムを回転させながら、一束づつ稲から穂を剥がしていました。



穂と藁屑をふるいで選別して穂をふごみ入れます



穂の運搬等に牛を使っていました



穂を入れるふご

● 穀の乾燥

穂ふごで運んだ穂は、稻わらで作ったむしろに広げて、天日で乾燥していました。天気の都合でよく乾燥できたり、曇りが続くと乾燥不十分で、なかなか穀摺りが出来ませんでした。

乾燥の状況判断は、穀殼をはがし米を歯で嚙んだときの硬さで判断していました。今は水分計があるので正確に確認が出来ます。



むしろで穀干し（昭和30年代）

● 粉摺りから出荷まで



発動機で粉摺り機を動かして玄米に仕上げていました。(当時の様子)

乾燥が終わった穀は、粉摺り機を使い玄米にして、俵につめて農協へ出荷します。粉摺りとは、穀から穀殻を除いて玄米にすることを言います。人が米を食べる場合には白米で食べるので、穀殻を除去する必要があります。粉摺り機は幅が50cm位、長さが3m位の大きさで、機械の中に約20cmのゴム製のロールが二つ重ね合わせであります。その隙間に自動的に穀が落ちるようにしてあり、若干違った速度で回転させて、その速度差で穀の表面を破って玄米にしていきます。



粉摺機から出てきた玄米は1斗枓(15kg)で計量して稻わらで作った俵に入れていました。



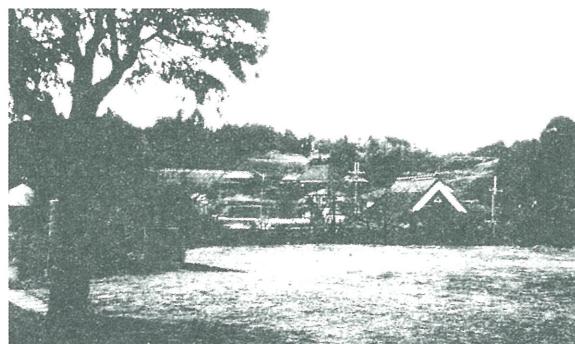
俵に入れた状態です、昭和中期まではこの状態で農協に出荷していました。(1俵/60kg)

養 蚕

宮村では農業以外の収入を得るために養蚕業が行われていました。養蚕業は政府の国策として奨励され明治末期から急速に進展した産業です。卵から幼虫に育てるための施設が二ヵ所、上野川と上馬杉にあり、24時間体制で管理していました。蚕は野生に存在しておらず人の手によって家畜化された昆虫です。その性質はおとなしく蚕の幼虫は逃げ出しません。成虫になっても羽根が退化しており飛ぶ事ができません。人間の世話なしでは生きていけない昆虫なのです。蚕は卵から孵化すると脱皮を4回行って成長します。幼虫の成長は早く食欲も旺盛。たくさんの蚕が一斉にエサを食べるとき、雨が降っているような音が響き渡ったと言います。幼虫にはエサを食べる口と糸を吐く口の2つがあり約65mm~85mmまで成長すると、いよいよ糸を吐きはじめます。40mm×50mm×高さ20mmくらいに仕切られた部屋が並ぶ簇(ぞく)と呼ばれる場所へ蚕を移動させると、2~3日糸を吐き続け自分の体のまわりに20mm×30~35mmの繭玉を作ります。蚕の一生は一ヶ月半ほどのはかないものです。



上野川共同稚蚕場



上馬杉共同稚蚕場跡地



収繭作業の様子



給桑作業

下野川には宮村で生産された生糸から糸を紡ぐ山敷製糸工場(稼働年不詳)がありました。失火が原因で工場を閉鎖し、社主は明治41年(1908)神戸に出て新しく会社を立ち上げました。その会社が現在の「(株)加実乃素本舗」です。



山敷製糸工場跡地



下野川日吉神社に奉納された絹糸見本

娯 樂

子どもは近所周りの子どもが集まって遊びました。男の子は「チャンバラ」や「魚釣り」、「めんこ」に「B玉遊び」、女の子は「ゴム跳び」や「陣取り」、「けんぱ」などで庭先を使って遊びました。お正月にはたこあげや、カルタやトランプなど家族で遊ぶのも楽しみでした。大人たちは「楽しみ(たのもし)講」やお茶会など農業の暇を見つけ楽しみ会を開いていました。子ども会の旅行や区の日帰り旅行、年に一度の村祭りなど娯楽の少なかった時代には一番の楽しみでした。



天気の良い日には凧あげをしていました。



海水浴でスイカ割り



メンコ(今のカード遊び)



祭りの神輿 巡行

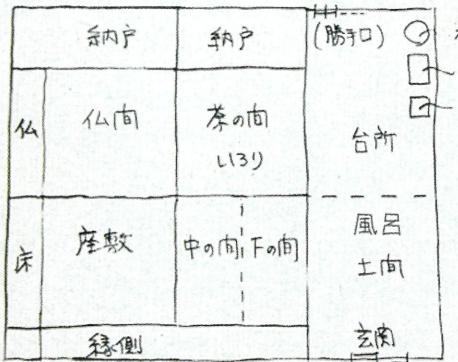


楽しい 茶話会

住まいの近代化

●住まい

住まいの近代化



江戸時代の間取り

明治初期、日本人の80%は農民で地主、小作農、自作農に分かれていました。

当時は庶民が田を持てる時代ではなかったので、それが一般的でした。

玄関から広がる土間では、料理を作ったり、農作業を行いました。また、いろいろのある茶の間でご飯を食べ、中の間・下の間が父母や子供達の寝室、座敷は客間として使用していました。

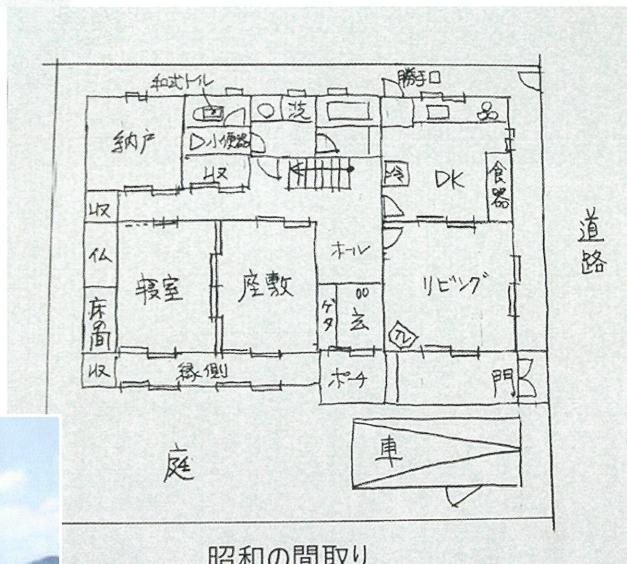
一番良い場所に座敷をつくり、お客様をもてなしていました。

外には井戸や便所、農耕用の牛と馬が住む納屋がありました。

昭和30年代から日本は高度経済成長をえます。そのため、昭和40年代から木造瓦葺き住宅を建てる人が急増しました。リビングとダイニングが作られるようになったのも昭和中期～後期でした。



茅葺屋根から木造瓦葺き住宅へ



昭和の間取り



近代的な住宅

● かまどからキッチンへ

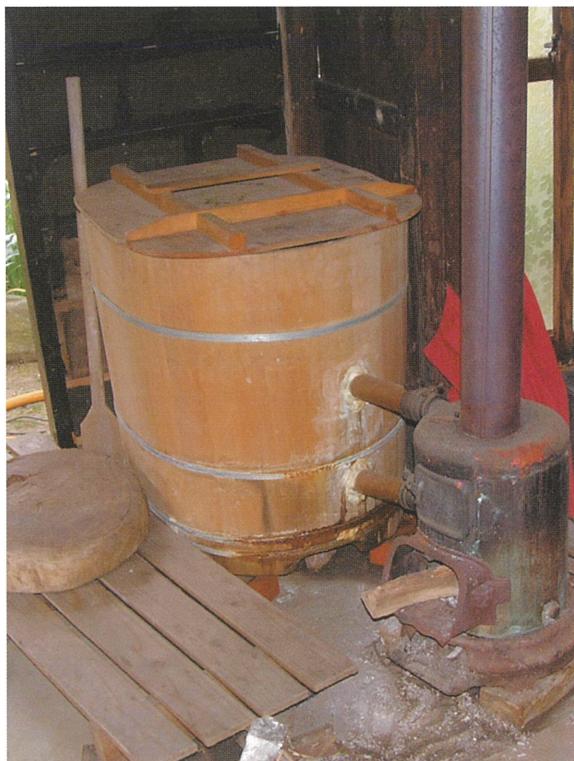


割木を使ったかまどからキッチンへ

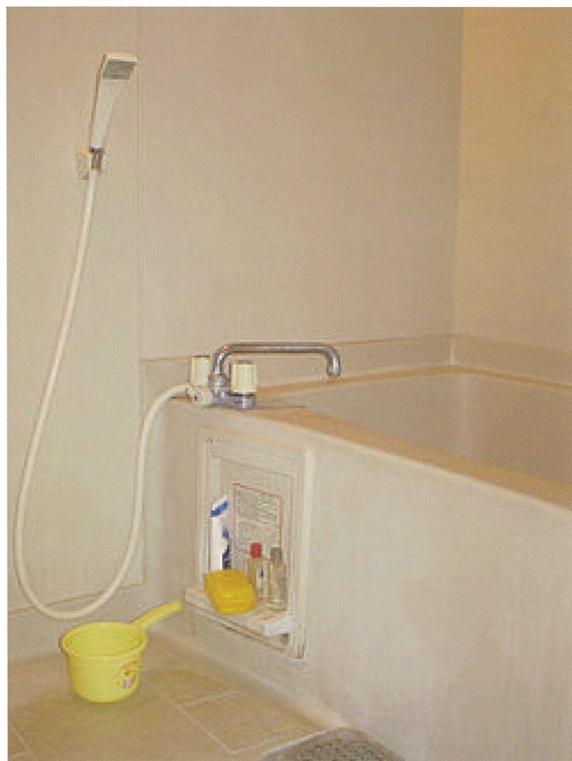


裸電球から蛍光灯になり明るくてまぶしかったです。本の字もハッキリ読むことが出来るようになりました。

● 風呂は薪からボイラー・エコキュートへ



日本の風呂の1つで、ヒノキで造った大型の小判型木桶に、火を焚くため鉄物製の釜と煙突が付いた形状をしている。煙突のついた窯の形状が鉄砲に似ているため、「鉄砲風呂」と呼ばれるものもありました。一般に普及したのは明治時代から大正時代にかけてと言われています。



壁・天井・浴槽・床を工場で成型しておき、現場に搬入して組み立てる風呂が普及していきました。浴室内全体が暖かくて快適でした。

● テレビの普及

NHKがテレビ放送を開始したのが昭和28年（1953）2月で、8月には民放もこれに続きました。この年、国産初の14型。17型白黒テレビが発売されました。サラリーマンの初任給が6,000円といわれた時代に1台20万円前後と、まさに高嶺の花。そこで人気を博したのが街頭テレビです。以来数年にわたり、力道山の空手チョップや大相撲の中継、エンタツ、アチャコの漫才に人々は熱狂したものです。



● 電話機の普及

ビジネス、個人使用など様々な場で利用されている電話ですが、甲南町でのその歴史は村に数台というところからはじまっています。昭和35年（1960）に宮地区団体加入電話が開通しました。当時は数軒が同じ電話番号でベルの回数で区分していました。

全戸に普及したのでとても便利になりました。



当時の様子



ハンドルで電話交換局を呼び出す方式から直接相手につながるダイヤル式にかわっていきました。

●上水道

井戸からツルベそして小型電気ポンプなどを使って生活用水を使っていましたが、上水道へと変わっていきました。宮地区に簡易水道が完成し、安心して水が飲めるようになりました。



水道管埋設工事



簡易水道の水源地があったところ

●下水道

平成元年12月7日から平成6年にかけて宮地区集落排水設備の工事が行われました。

当時の状況

戸数:288戸 人口:1288人

工事費用:18億9400万円 (1戸当たり62万円)

処理能力:346トン/日



宅内配管工事の様子



処理施設は当番制で清掃していました。



各家のトイレも写真のように水洗トイレになり文化的で清潔になりました。

農業の近代化

農業

昭和36年（1961）「農業基本法」が制定されて、国の積極的な施策として農業の後進性を打破し、体質を改善し、農家の所得と生活の向上をはかる農政の基本方針が定まった。翌昭和37年（1962）から農業構造改善事業として全国の農村地域に対して「新しい村づくり」がはじまり甲南町もこの指定地域に入り、昭和38年（1963）11月に将来の町の農業発展を位置づける『甲南町農業構造改善事業計画』が樹立されました。具体的には、第一に柑子、野川地区内の水田93.6haのうち、急斜面を除いて、浅野川流域28.8haの区画整理をおこない稻作の省力化をはかりました。また同地域内の丘陵地16.1haを開拓して集団茶園を造成し、水稻部門の省力化により浮いた労力を茶にふりむけ、さらに茶及び水田経営の労力競合調整のため、動力茶摘機、防除機械、小型コンバインを導入すること。第二に地区を超える田全体の計画として、まず水稻の省力化と産米の品質向上をはかるため、粒乾燥調製施設を設置し、また優良品質の製茶生産をはかるため、製茶加工施設を設け近代的茶の生産体系が確立されました。又、農業の振興を図るために、農業構造の強化、圃場整備事業や農道整備事業が進められました。

宮地区においても、圃場整備事業に併せて浅野川の河川改修事業や県道上馬杉一野尻線の道路改良事業が実施され、これら一連の農業施策により農業環境、治水能力、道路交通環境は飛躍的に向上しました。

農業構造改善事業地区別計画の構想
(昭和38年甲南町計画書より)

地 区 名		柑子	野川地区	地域全体	
基 幹 作 物		米	緑茶	米	緑茶
区 分		現況(戸)	目標(戸)	現況(戸)	目標(戸)
經營類型の改善目標	商品生産農家	米作専業経営	42	15	601
	米作と茶経営	0	26	13	166
	米作と酪農経営	13	12	119	108
	小 計	55	53	733	659
	半商品生産農家	33	25	360	402
	自給的農家	17	18	377	352
	協業経営加入農家	—	—	—	—
合 計		105	96	1470	1413



野川の土地基盤整備事業



ブルドーザーによる工事



土地改良総合整備（圃場整備）
完成式典（平成2年1月31日）

宮地区 土地改良事業圃場整備の概要

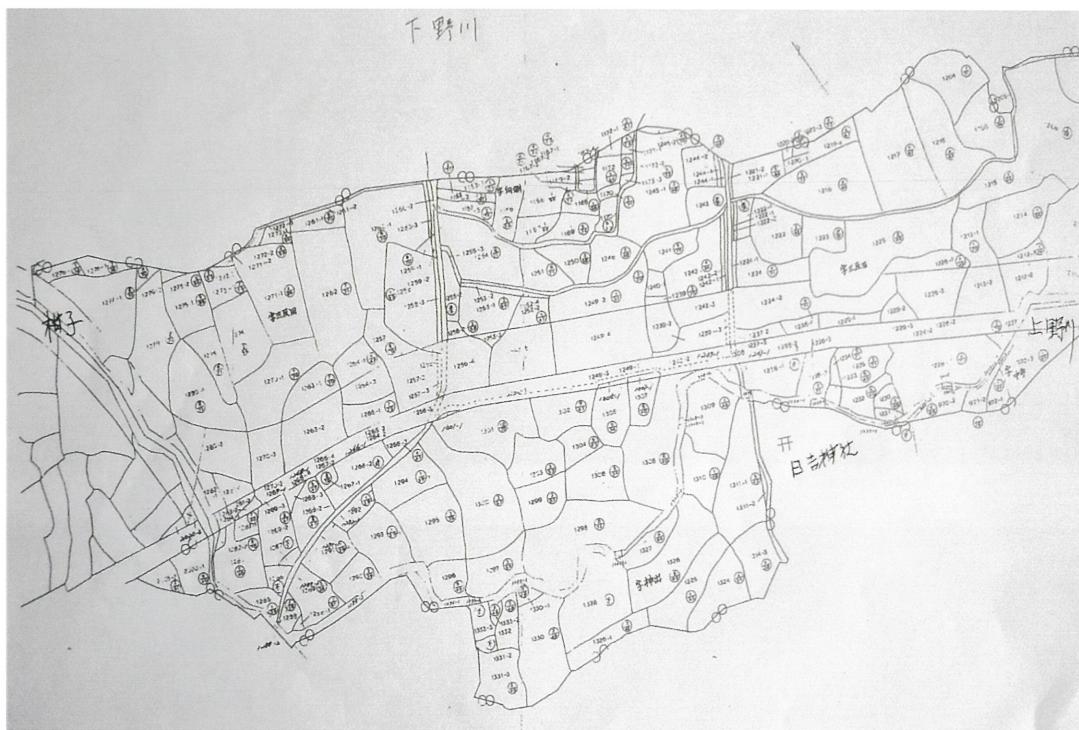
字名		起工	竣工	事業費（千円）	地区面積(ha)	整地面積(ha)
構造改善	柑 子	昭和38年	昭和40年	28,213	18.6	13.6
	下野川			28,957	(記録無)	15.2
柑 子		昭和50年	昭和55年	186,000	29.8	25.2
下野川 上野川 下馬杉		昭和54年	昭和62年	586,338	69.1	49.4
上馬杉		昭和56年	平成元年	386,786	38.6	31.3
合 計				1,216,294	(156.1)	134.7

○宮地区団体圃場整備事業概要

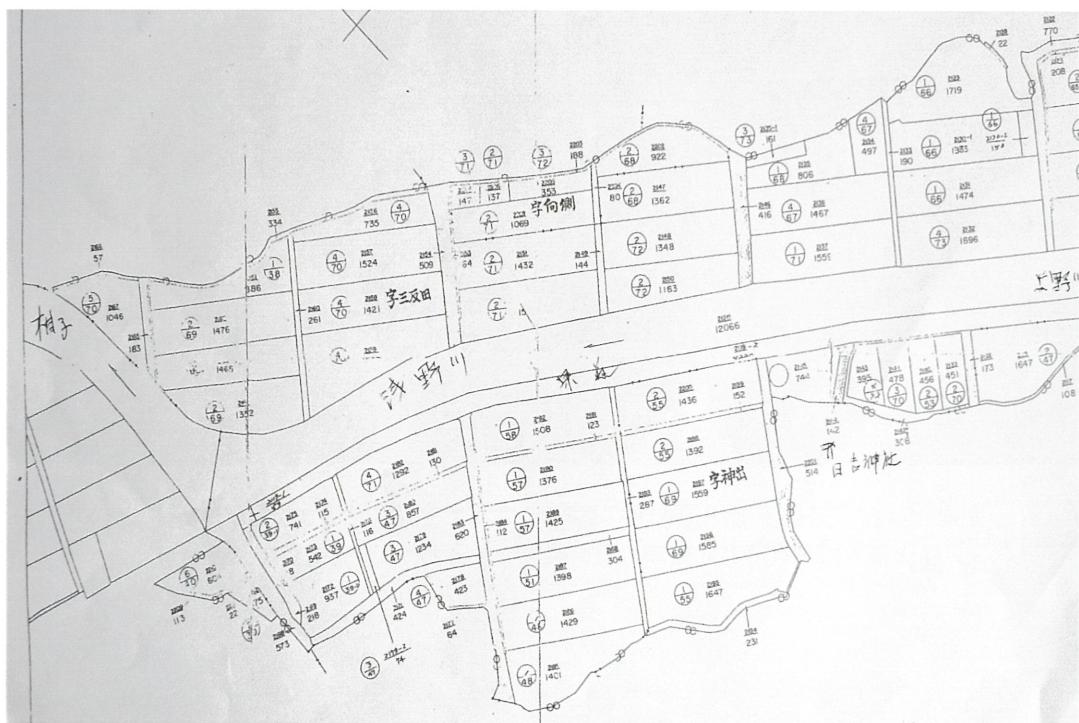
宮地区は古くより温和、勤勉な先人たちにより伝承された豊かな自然に恵まれた純農村である。長い歴史に新たな一頁を書き加えられるべき大事業が数年の歳月を経て此処に完成を見るに至りました。通年滞水と重粘土質の狭小な圃場が道路、河川の改修と相まって見違えるばかりの美田に産まれ変わり河川には清水が流れる美しい我が郷土になりました。又、農作業も小型機械から大型機械へと変わっていき、重労働から開放されました。

土地改良総合整備（下野川圃場整備）完成前後の様子

圃場整備前

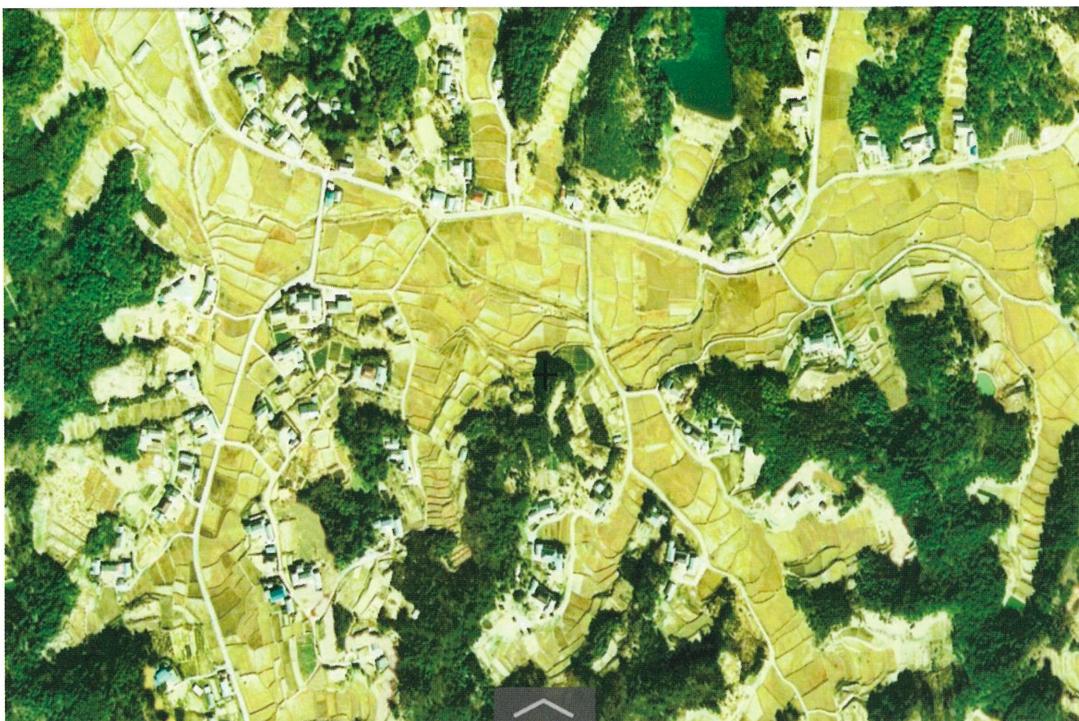


圃場整備後（昭和40年頃）

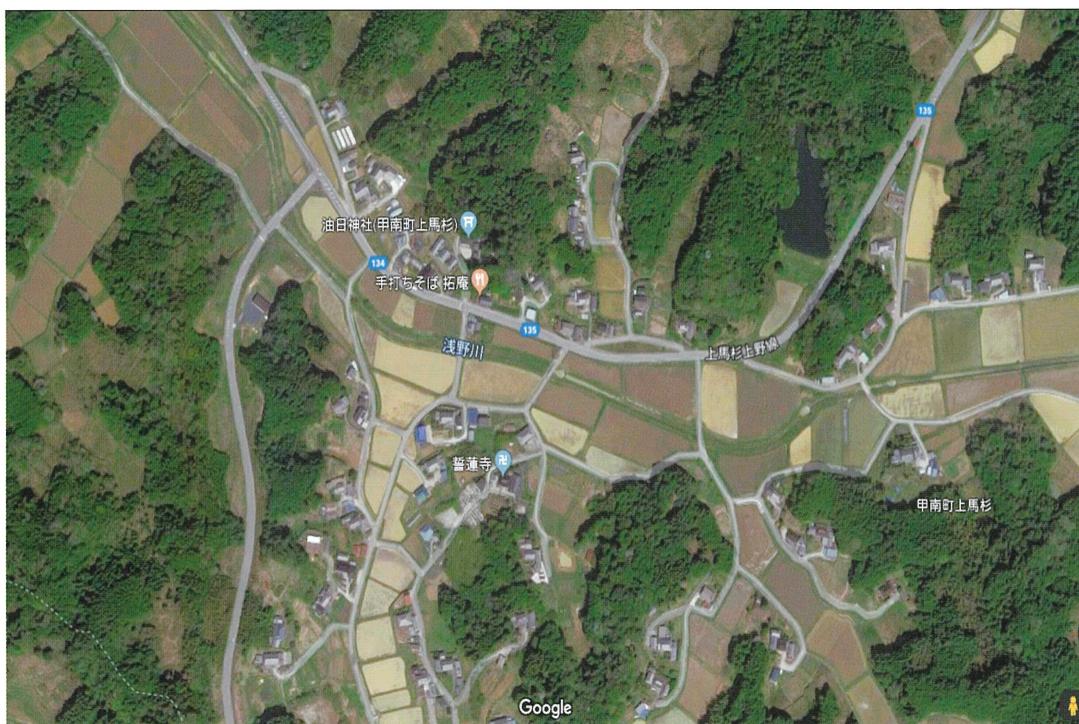


土地改良総合整備（上馬杉圃場整備）完成前後の写真

圃場整備前



圃場整備後（平成元年頃）



完成後は台風時の浅野川氾濫もなくなり安心して生活できるようになりました。
又、農作業も機械化されて効率の良い農業へと変わっていきました。

●耕起作業

鍬による作業から、耕耘機へ、大型トラクターへと変わっていき、農作業が楽に出来るようになりました。



耕耘機による耕起作業（昭和40年から昭和54年頃）



トラクターによる耕起作業（昭和55年頃から）

●代掻き作業

耕耘機による代掻き作業からトラクターによる作業へと変わり、きれいに整地されるようになりました。



耕耘機による代掻き作業（昭和40年から昭和54年頃）



トラクターによる代掻き作業（昭和55年頃から）

●粉播きから苗代作業



水田の保温折衷苗代から室内で粉播き作業



ハウスによる苗代になりました。

●田植え作業



2条植歩行田植え機（昭和55年から平成元年頃）



5条植乗用田植え作業（平成2年頃から）

●溝切り作業（中干しと良質米つくり）



溝切り機



溝切り作業

●消毒作業



二化螟虫の消毒風景



背負式噴霧器



小型無人ヘリコプターによる消毒へ

● 稲刈りから粉摺り迄



1条刈りバインダーによる稲刈り（昭和50年頃）



動力脱穀機



自動脱穀機



小型コンバインによる稲刈り



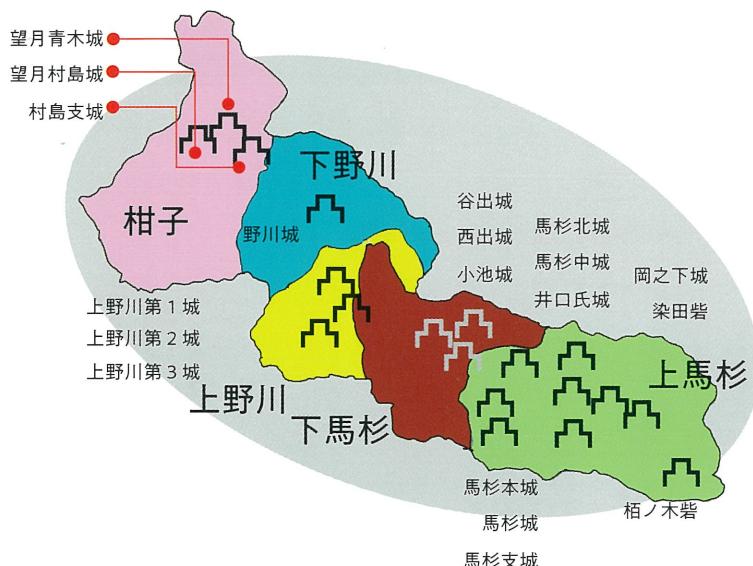
大型コンバインによる稲刈り



粉の乾燥から粉摺り作業、計量まで自動化

宮の城郭群

柑子の望月青木城（1480年築）望月村島城（1498年築）村島支城は共に望月氏の居城で、下野川の野川城は福泉寺を建立福井氏の居城と伝えられています。又、上馬杉の各城は馬杉氏の居城とされています。その他の城については城主が不明ではあります、そのどちらかの影響下にあるものと考えられます。構造は地域を見渡せる高台にあり、狭い地域にたくさんの城が存在します。宮地区の南側はすべて伊賀との国境にあり入山権などの小競り合いあったものと考えられます。



野川城

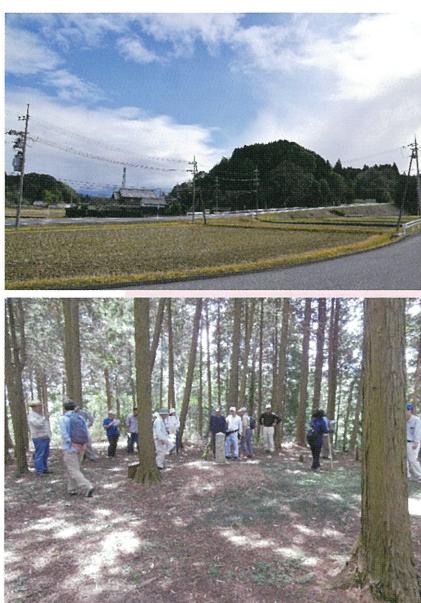
応永17年（1410）城主「福井兵庫之助氏政」が下野川中程の福泉寺裏山に城を築きました。

集落を見下ろす丘陵先端に位置し、山麓からの比高は約25メートルを測る。西側を土壘として削り残した削平地が尾根先にあり、南へ伸びている土壘の西側は堀切によって遮断しています。



望月村嶋城跡

柑子集落の中央丘陵（福寺裏手）には、望月村嶋城、望月青木城の2城が連なって築かれています。村嶋城は、望月村島守重元が文明12年（1480）に居住していたと記されています。中世の後期、この地の領主が、部落を治めるとともに、戦国乱世に備えるために柑子の中心にあたるこの丘陵に築いたのがこの城です。



望月青木城跡

村嶋城の北西に築かれたのが青木城で元重の次男、重武を城主にしたと古文書に書かれています。南北に続く尾根に郭を連ね、丘陵全体が城のようになっています。青木城からは、柑子全体が見渡せる最も良い場所に築かれたといえるでしょう。

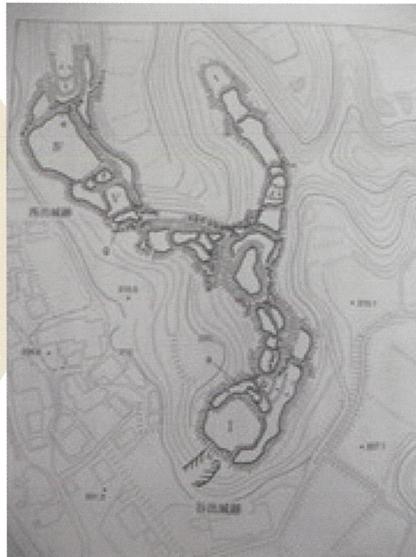




●谷出城・西出城・小池城

南東側には馬杉城などが密集して分布する上馬杉とつながり、南側は、二谷筋を進むと伊賀国阿山へと抜ける。北側は望月の各城が在る柑子へとつながる、これら一連の城郭は馬杉氏の勢力下にあったとみられる。

複雑な地形を巧みに利用し、三方が見渡せる丘陵の先端部に、戦国時代に砦としてつくられた山城といわれる小池城・谷出城・西出城の城跡が存在します。



●上馬杉の城郭群



●馬杉本城

馬杉本城は伊賀国境から伸びる南の丘陵から上馬杉集落の中央へ張り出す幅広い尾根に立地する。「甲賀郡志」に「馬杉氏城跡」と見えるのがこれである。土壘の曲輪の内径は東西25m、南北30mとこの地域で最大の規模を持ち南背後の堀切は巨大で堀底には武者隠しがあります。



北側の各城は太子堂を守るよう形成されており、馬杉氏が太子堂を守る必要があったと思われる。そのほか、栢ノ木砦は伊賀国境にあり、ほかの城と同じく伊賀国の城との違いがほどんどなく伊賀国「藤林長門守」の支城であったとも考えられる。伊賀との国境争いが厳しかった故、上馬杉に多くの城跡が存在するとも考察できます。

上野川の3城については、調査等が行われておません。ただどの場所も見晴らしのよい高台で城跡の雰囲気が漂う場所です。

宮の社寺

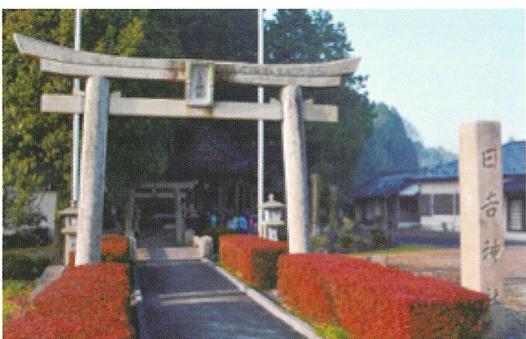
● 櫻神社（柑子）

祭神は大己貴命（おおなむちのみこと）で、延暦年間（782～806）僧最澄が日吉神を桜の樹の下に奉祀したのが始まりとされています。一説には、文明11年（1479）この地の城主望月重房が遠祖滋野親王を桜大明神と称して創祀したとも伝えられる。応永3年（1396）に再建され、更に享和3年（1803）に再建されました。が、200年間の時を経て老朽化が進み、令和2年（2020）に区民の寄進により令和の大改修が行われ、創建当時の色鮮やかな本殿が蘇りました。本殿左右の小宮舎には金毘羅神社、津島神社、愛宕神社、御所大明神など10社の境内社があります。例祭は4月に執り行われ、子供神輿の巡行が有ります。7月の津島神社の祇園祭では、花奪い神事が執り行われています。



令和の大改修

● 日吉神社、末鷲稻荷（上野川、下野川）



上下野川の神社として祀られる日吉神社は創祀年代不詳。往昔坂本日吉大社東本宮の祭神大山咋神を勧請し山王大權現と名づけ、明治維新後「日吉神社」と改名されました。現神社には、大山咋命を奉祀し往古山王權現と申し奉ります。昔は現在地より約80m山の中腹に鎮座されていたが、宝永5年（1708）現在地に社殿を造営鎮座されています。昭和54年甲南第三小学校が新築されるに伴い、旧校舎正面玄関にあった石柱4本が日吉神社境内にモニュメントとして建立されています。



上野川末鷲稻荷

現在マンマ・ミアの駐車場のすぐ上が境内で、森の中にひっそりとたたずんでいます。

●島神社（下馬杉）

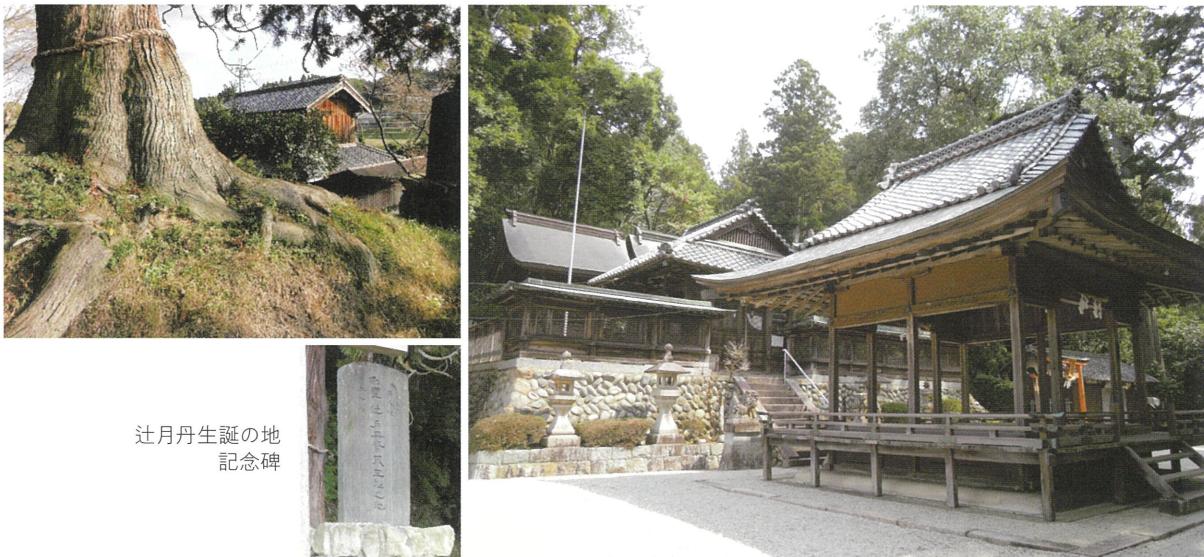


太い桧の木立に囲まれ、数百メートルも続く参道を進んでいくと、石の鳥居とその先の社殿が目に飛び込んでいます。境内は、太い木々に囲まれ、人気を全く感じさせない静寂な空気にあふれ、その奥に立つ本殿は莊厳な雰囲気を醸し出しています。

祭神は、市杵島姫命（いちきしまのみこと）、創建の年紀は不詳、貞元年間中（956）に橘朝臣敏保により安芸の国巣島神社の分靈を勧請され、その後延徳2年（1490）に領主馬杉丹後守により現在の社地に再建されたとされています。

現在の社殿は、安永8年（1780）に災害で大きな被害が出たため同年に改築されました。

●油日神社（上馬杉）



御祭神は天忍日命

天元4年（981）鎮座。橘朝臣敏保卿の創祀と言います。甲賀町油日の「油日神社」と同様の社伝を伝えます。明治29年9月3日貴隆神社を合祀しました。本社の東北三丁ばかりの所に太子山と称する小高い山があり杉、雜木等多く繁っていますが、口碑によれば聖徳太子が馬をつながれた所と伝えられています。慶長7年及び延宝7年の検地の時、除地となり、反別二反歩が現在社有林となっています。宝物に刀があり天元年間橘朝臣敏保卿が悪蛇退治の時に用いたものであると伝えています。明治9年10月村社に列す。境内には無外流創始辻月丹が寄贈した灯籠と石碑があります。神社は杉の大木に覆われる中、ご神体と祀られる御神木は周囲6.7mもの大樹として有名です。

● 東光山 瑞雲院 崇福寺 (浄土宗)



柑子

昔は、旧安土町淨嚴院の末寺が、後に甲賀町滝の称名寺の末寺となりました。創立は明らかでないが、1600年代後半からの記録は残っています。

本尊として、阿弥陀如来座像をお祀りしている。また不動明王立像、毘沙門天立像および地蔵菩薩像などもお祀りしています。

● 霊華山 圓通寺 (天台宗)

慶安元年(1648)三井寺の僧、秀尊(柑子出生)が堂宇を造り、山林田畠を開き維持したのが本寺です。平成13年に老朽化した本堂を取り壊し、新築して現在に至っています。本尊として、十一面觀音菩薩をお祀りしています。

かつて柑子には天台宗清福寺と浄土宗薬師寺があったが廃寺となりました。



● 長寿山 法池院 福泉寺 (浄土宗)

下野川



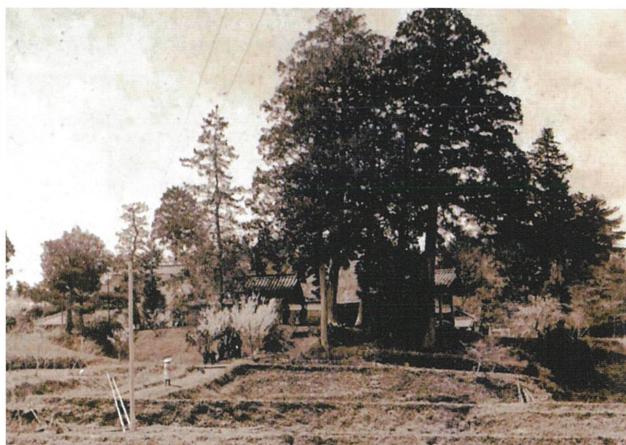
応永17年(1410)現寺院裏山に城を築き、当地方を領地としていた豪族「福井兵庫之助氏政」が僧準誉円長に深く帰依して一族及び当地住民の先祖の菩提を弔うとともに、その繁栄と幸福を祈念し無量寿光の阿弥陀仏を安置し、幸福の泉と豪族「福井兵庫之助氏政」の福井の井戸をもじって福泉寺と称します。

湖国十一面觀音第七番靈場 ●鶴足山 伊勢廻寺 (真言宗) 上野川
甲賀西国觀音靈場第13番



左から毘沙門天（平安時代作） 十一面觀音像（室町時代作）
不動明王（鎌倉時代作）

宮地域内では最も古く創建は平安時代初期の大同元年（806）で、正徳4年（1714）に再建しています。1200年以上の歴史があるお寺です。本尊の十一面觀音像と毘沙門天、不動明王の三体は国の重要文化財に指定されています。伊勢廻寺のいわれは、ご本尊が龜山の鶴足山野登寺より、譲り受けたと伝えられ、「伊勢から回ってきた寺」から伊勢廻寺と名付けられたと言われています。本堂の右奥には歡喜天堂が建ち「昇天講」の会員により例祭が行われています。本堂裏山には、秋葉神社など三体が祀られています。また境内には東海自然歩道の休憩場所としてトイレも併設しています。



伊勢廻寺遠景 大正12年撮影



伊勢廻寺託児所 昭和3年頃

●宝地山 最勝院 阿弥陀寺 (浄土宗)

上野川



旧 最勝院 阿弥陀寺

元は義勇山の麓に有ったとされるが火災により本堂や記録も消失、元禄5年(1692)萩原に再建した。平成27年に本堂と庫裏の竣工と墓地の移転が行われました。

甲賀西国観音霊場第12番 ●天満山 福龍寺 (浄土宗) 下馬杉



少し小高い所に建つ福龍寺からは下馬杉の村中が一望でき、集落のお寺として存在感を示しています。

十一面觀音立像

福龍寺の左側にある観音堂に祀られています。像高171センチの尊像は平安時代末期の造像とされ全体に細身ですが、ふくらとした肉付きの肩、迫力さえ感じる胸の張り、鋭い彫り跡を見せる衣文の部分などは、確かな仏師のわざを思わせます。

●聖徳山 誓蓮寺（浄土宗） 上馬杉



誓蓮寺にある忍者の伝説

若い甲賀忍者のくノ一が伊賀忍者に恋をし、恋心は実を結んだのですが伊賀忍者の夫は役目中に死んでしまいました。甲賀のくノ一であるが為、伊賀では活躍の場を与えられず寂しく伊賀の地で過ごし伊賀で生涯を閉じました。その時は簡単に葬られたのですが、しばらくするとその墓から毎夜しくしくと泣く声が聞こえてきたそうです。そのうわさを聞いた上馬杉の誓蓮寺の住職は「彼女が故郷恋しくて泣いているに違いない」と墓を掘り起こして彼女の骨を誓蓮寺に持ち帰り、ねんごろに埋葬供養したところ泣き声は聞こえなくなったそうです。今も彼女の墓は誓蓮寺の無縁仏群の中に残っています。



柑子



柑子

● 柑子の生い立ち

柑子の地名は、柑橘の一種「こうじみかん」が植えられていたとの由来があります。柑子村は平安の昔より池の原郷、杣の荘に属し、宮地区の北西部に位置する。文献では鎌倉時代の嘉歎2年(1327)池原杣内柑子村の地名が東大寺文書にみられます。中世南北朝時代には山中氏が地頭職に、室町時代には望月氏の支配となり、中世城郭跡が複数点在します。また、近江と伊賀を結ぶ重要な伊賀街道が、水口宿、深川、野田、竜法師、区内南西部の長峰地区を通り内保へと続き、当時は茶店や旅籠も建ち、旅人などで賑わっていました。

● 産業の変遷

柑子の産業としては主に農業で養蚕、養鶏、製縄などを副業としていました。昭和36年(1961)の農業基本法の制定による農業構造改善事業をうけ、昭和38年(1963)から昭和40年(1965)に第1次農業改善事業が浅野川改修工事と合わせて施工され13余haの農地が生まれ変わり、又その一環として区共有山地の御所に7haの茶畠が造成されお茶の栽培も行われました。昭和55年(1980)には団体営圃場整備事業により25余haの農地が生まれ変わり、農業の機械化が進みました。昭和62年(1987)にはすべての事業が完了し、記念碑の除幕式が行われ、これを記念して第一回 柑子夏祭りが開催されました。



● 工場の進出

昭和40年代後半になると、柑子地区にも工場進出の波が押し寄せ、昭和46年(1972)に堂の谷地先で造工事が始まったのを皮切りに、昭和48年(1973)に3社が操業を始め、その後昭和63年(1988)までに3社が操業を始めた。平成12年(2000)には甲南フロンティアパークが造成を開始、平成15年(2002)から分譲が開始され令和元年末(2019)には22社が操業しており、区内全体では32社の企業が操業し、日本経済の発展に寄与しています。



●柑子の特産「愛柑梅」

昭和43年(1968)から柑子老人クラブ活動として清福寺廃寺跡に梅を栽培し、「梅干し」を作ったのが始まりで、昭和54年(1979)には学校給食にも使われました。平成元年に老人クラブの名称が柑子愛柑クラブに変更されたことから、愛柑クラブの愛柑を取って「愛柑梅」と名付けられました。長年の活動に対し平成14年(2002)に厚生労働大臣表彰を受け、平成19年(2007)から甲南フロンティアパーク隣地に梅園を拓き100本近くの梅木を植栽し、平成22年(2010)には、旧公民館に専用加工所「みのり工房」を設置し、「JA花野果市」などで販売しています。



柑子

●柑子のお宝「柑子の鬼面」

平成26年(2014)に、集会所の長持ちから鬼面と般若面と思われる二枚の面が現れました。またこの鬼面と共に二つのほら貝も出てきました。調査の結果、二枚とも鬼の面(それぞれ男鬼面、女鬼面)で、造られたのは江戸中期～後期、材質は檜材の本体に桜材の角、漆仕上げとなっている。本来、鬼は恐ろしく怖いものであるが、これを味方に付ければ、疫病や、干ばつ、災難を追い払い、自分たちを守ってくれると昔の人は考えていたようで、この面も何かの司祭に使っていたらしく、かなり使い込んでいます。この鬼面が収められていた箱は、蓋表に「般若假面」、蓋裏には明治40年5月(1907)新調と書かれ、長い間区長の書類入れとして使われてきました。しかし、この鬼面が何に使われてきたのか伝承は区の中では忘れ去られていましたが、区の古資料を調べた結果「雨乞い祀り」、「行者講」などが考えられ、資料を総合すると、「雨乞い祀り」が有力と思われます。「鬼面」は、今は元の箱に収まり、「柑子のお宝」として区内の安全を見守っています。



● 柑子の催し

「春の大祭と子供神輿の巡航」

櫻神社の春の大祭（旧祭日4月14日、現在は4月第2日曜）に合わせて平成4年（1992）より、小学生を中心とした子供神輿が区内各組の御旅所を巡回し、区民の楽しみとなっています。



「花奪い祭と柑子夏祭り」

櫻神社の境内社である津島神社の祇園祭（旧祭日7月14日、現在は7月20日前後の日曜）では、悪霊退散を願って各組で作られた花笠が奉納され、この花を取り合う滋賀県選択無形民俗文化財「花奪い神事」が行われます。これに合わせて柑子夏祭りが昭和62年（1987）から開催され、模擬店やゲームなどが行われ、区民の楽しみとなっています。



花奪い

「柑子スポーツフェスティバル」と「柑子区民グランド」

昭和47年より区民の健康と親睦を兼ねて工場用地を借りて「第1回柑子区民運動会」を開催しました。その後、柑子区が町健康づくりの指定を受けたことを機に昭和55年に「区民グランド」が造成され、区民の健康増進と地元企業との親睦の場として運動会は収穫感謝祭を兼ねてお昼には餅つき大会や手製神輿による御神酒拝受などが行われました。平成23年からは、少子高齢化の波を受けて競技内容を高齢者に合わせなど工夫を行い、「柑子スポーツフェスティバル」と名を変えて続けられています。また、区民グランドでは、ゲートボールやグラウンドゴルフ、区内企業の野球チームが練習や試合などに使用しており、平成26年からは、「柑子区民グランド」で少年野球チーム・ポニー球団が練習の場とするなど、幅広く利用されています。



●柑子の施設

「公民館」

昭和25年に柑子集会所（現櫻神社社務所）が建築され、当時は青年会や婦人会などの活動の場とされていましたが手狭となり、昭和49年に念願の二階建ての公民館（現みのり工房）が建設され、敬老会やその他の催しに使用されました。しかし、区民の高齢化が進み、バリアフリー化が求められたことから、平成19年に大会議室、調理室、和室、事務室からなる395平方メートル平屋建ての公民館が建設、さらに30台余りの駐車場も併設され、様々な催しや区民、区内の企業との交流に使われています。



柑
子

「みのり工房」

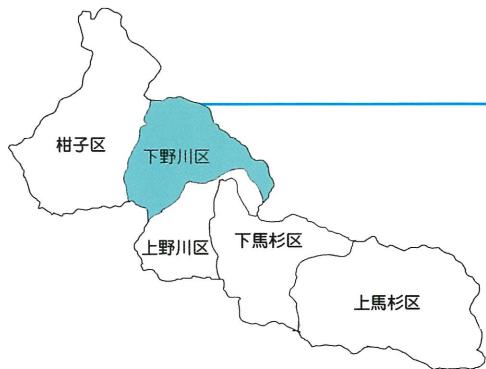
平成19年に新公民館が竣工したため、旧公民館の一階を改造して、「みのり工房」が平成22年に開設されました。ここでは、梅選別機や洗浄機、樽保存庫などを備え、愛柑梅推進事業部が自家梅園で収穫された梅果実を選別洗浄し、塩漬けから加工包装までを行い、学校給食やJA花野果市などで販売しています。



「柑子の民間娯楽施設」



下野川



下野川

柑子と上野川の間にあり、野川城から眺めると浅野川が集落の中心を流れ、その南北の丘陵地に集落が広がる。肥沃な土地を活かし水田が広がる昔から野川村、又は大字野川の北部を下野川と呼称、今もそれを受け継ぐが、行政区は下野川と上野川とに分かれる。ただ日吉神社と伊勢廻寺は両地区が氏子、檀家として守っています。



昭和45年頃、河川改修の後に浅野川沿いに桜が植栽され、区民全員で大切に管理しています。現在甲賀市の「桜の名所」となっています。毎年開花時期（4月上旬～4月中旬）には多くの方が見物に来られます。夜間にはライトアップもされ必見です。





ふれあい広場にあるしだれ藤

老人クラブ（延寿会）の活動状況
会員の育てた菊、朝顔の展示鑑賞会

最短距離で谷から谷に渡る為に掘削された隧道です。

*名称 瀬ノ谷隧道

延長73m 幅員1.6m 高さ2.2m
昭和2年から4年の歳月をかけ、青々土の山をくり抜き完成しました。しかし素掘りの為、昭和24年に全面コンクリート壁に補強されました。

日吉神社常夜燈

元浅間大日如来（現在伊勢廻寺境内に鎮座）が遷座されていました。浅間山が昭和38年第一次農業構造改革事業により山自体が旧河川の埋め立てに使われたため同山の跡地に同じく廃止となり旧参道から現在地に移転されました。



下野川夏まつり



夏祭りは、区役員、各種団体、ボランティア、区民の皆様方の協力により毎年盛大に開催されています。特にフィナーレの花火はとても綺麗です。



第30回記念イベントyokko公演ライブ

下野川



上野川



上野川

上野川区は、宮地区のほぼ中央にあり、明治以来、宮村役場や、小学校、農協など重要な施設が上野川に存在します。圃場や人口が少ないこの地では、商店や職人が多く、配置販売の行商に携わる家も数多く見られました。県道上馬杉野尻線と甲賀阿山線、市道野川杉谷の交点にあり、新名神高速道路が開通して以来、名阪国道や伊賀からの利用者が増加し交通量が多くなりました。近年では他地域と比較して若者の定着率が高く三世代家族も増加傾向にあります。法人化した営農組合や、夏まつりでも青年層が活躍してくれます。



上野川には、昭和の中頃は沢山の商店がありました。

昭和30年代には、魚屋が2軒、呉服屋が2軒、お菓子屋文具の店、農協には農協スーパー、配置売薬の業者も数件存在しました。昭和50年代には電気屋さんも開店し、上野川の商工会として懇親会も行われていました。平成に入ると店主の高齢化などで多くの店が閉じられましたが、令和の今、工場跡地や民家を使ったカフェや、雑貨屋さん、整体屋さん、観光農園などもでき、賑わいを取り戻しつつあります。



上野川



日吉神社御旅所の桜



上野川常夜灯

上野川の「常夜灯」は、第三小学校の創立と同年の明治41年（1908）に、区内はもちろん村内や親類縁者の寄進により建立しました。今も建立の日には当時の発起人の子孫が集まりに塔の掃除と祈願祭を執り行っています。



● 上野川夏まつり

30年以上も続くこの夏まつりは、青年層のグループたけのこ会が主体となって、開催してくれています。夏まつり当日は、高校生や大学生もお店の手伝いをしてくれます。もちろんステージでは子ども達のカラオケやゲームをたけのこ会の皆さんが盛り上げてくれます。地域のふれあいの場所を提供してくれる、若者がたくましく思える1日です。



● ドラマや映画のロケーション



上野川に、NHKのドラマや映画に何度かロケ地として登場しています。大河ドラマ「江～姫たちの戦国」(2011年)土曜ドラマスペシャル「真珠湾からの帰還」(2011年)朝ドラ「ごちそうさん」(2013年)朝ドラ「あさが来た」(2015年)映画「菊とギロチン」瀬々敬久監督(2018年公開)などです。

農事組合法人 みどりの里上野川(以下宮農組合)が全面協力し、畑の耕作準備や農具の持ち方や使い方の指導。また草刈りの時期を遅らせたり早めたりして、撮影する環境保持に協力しています。

上野川がロケに適しているのは、大きな道路があり機材の運び入れが容易で、谷に入ると自動車などの雑音を拾いにくいことと、イノシシ柵などが無く、どの時代にもマッチできることなどがスタッフには好評です。



朝ドラ「ごちそうさん」



●観光ブルーベリー園 宮ベリー

平成18年に仲間10人と、宮ベリーを結成し、圃場の整備や植栽を始めました。2年後によくやく観光農園としてOPEN、仲間で立ち上げた農場が珍しかったのか、新聞やテレビでも紹介され、順調に客足を伸ばし、今では地域の顔となっています。経営者に聞くと最近の地球温暖化のため、果樹の熟成やお客様が暑すぎる気候のため苦労も多いと聞きました。環境の変化は、確実に宮にも影響しています。



●上野川の農業

上野川は耕地が少なく、個別の耕作面積も1町歩にも満たない農家が多く、そのためコスト低減のための組織作りの取り組みを、早くから始めました。平成8年(1996)に上野川営農組合を設立、農家の機械にかかる経費を抑え、仕事を集約することで、農業収入を増やしました。減反も湿地が多いこの地域での麦作は厳しいので、平成18年よりソバによる転作も始めました。

平成19年(2007)には全農家加入して集落一農場化が実現しました。これにより作付け場所や、減反の場所の固定化など地区の農業を一本化して管理できるようになりました。

平成22年(2010)には、30名の組合員にて法人化し「農事組合法人みどりの里上野川」を設立しました。地域の農業を集約化し、圃場、灌水肥培管理、草刈りに至るまで、法人が一括管理することになりました。今では地域を支える原動力となり、中山間地域での農環境の整備と、荒れ地化を防止などの取り組みに、一定の評価を受けています。

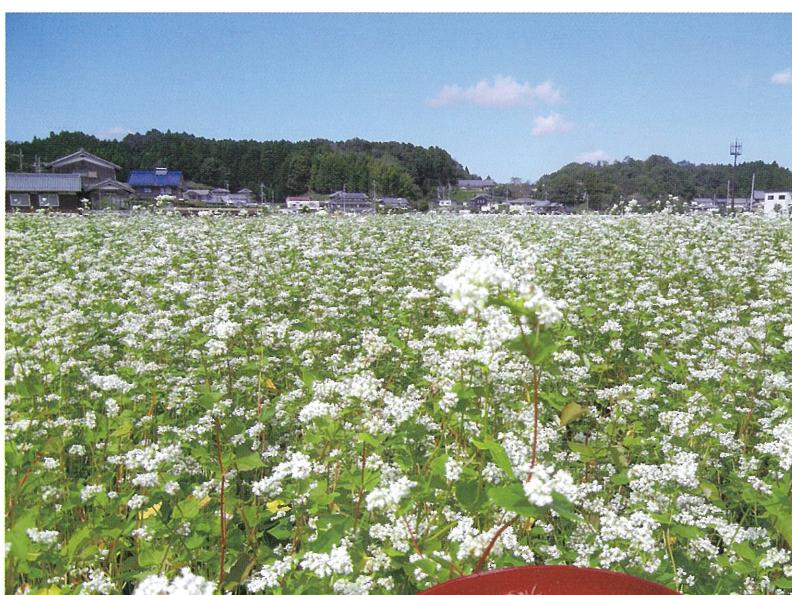
今後は後継者を育成すると共に、継続できる農業と地域の環境保全のために、組合法人の果たす役割は大きいと考えます。

下馬杉



下馬杉

下馬杉は宮地区の中央部よりやや東南に位置する、甲南丘陵上にあり、近年までは重粘土質に覆われた耕作地は畑に向かず稻作を中心とした農業が主たる産業でした。干魃に弱いゆえ年中水を貯めた水田は農家を苦しめました。近年宮地区にも広がったソバ栽培は下馬杉から始まり、地元産のそば粉を使ったそば店も出店しています。地域活動は区行事や社寺の行事も伝統を重んじ活動しています。



[そば]

宮地区のそばは、平成12年頃に下馬杉の有志の人たちによって始まりました。

先進地研修やそば打ち講習会を繰り返し取組の輪を広げ、現在は當農組織で生産を続けています。各種のイベントなどで地域の特産品の一つとして人々を楽しませています。





〔隧道〕

小池谷（下馬杉）～滝地先（甲賀町）にある水田の耕作農道として作られました。

延長31メートル

幅員2.2メートル

高さ2.8メートル

昭和34年に完成した。

下馬杉



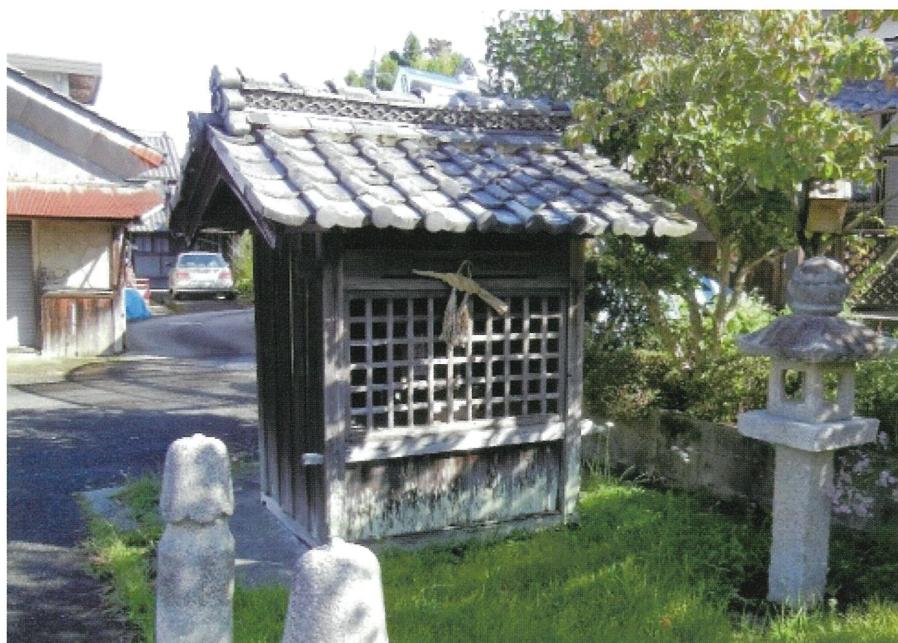
農道整備作業後の集合写真



〔ため池〕

下馬杉の主要なため池は、出雲池と新池の2つです。浅野川の水とともに集落内の水田耕作を支えています。夏の草刈りは池のメンテナンスのために重要な仕事です。

下馬杉



毎年恒例の夏まつり。夜店や演芸、花火もあって帰省客も大勢参加してみんなで盛り上がります！

愛宕さん

火の神様として下馬杉の中心部に祀られ、村中の安全を静かに見守っています。

下馬杉



高齢者のパワーは衰えません。元気！な下馬杉の象徴です。

敬老会 収穫祭



[下馬杉の小字名]

岩ヶ谷 出雲 松谷 流レ 黒津 小池 高尾 小池谷 谷出 堀越 山ノ内 島谷
森ヶ下 長楚 堂城 堂前 丈分 西悪谷 惡谷 牛王谷 宮ノ下 仁生谷 角田
丹波街道 田頃谷 池ノ谷 猿ヶ芝 久保ヶ谷 西出 谷出

上馬杉

上
馬
杉

宮地区の東端に位置し、東側を甲賀町、南を伊賀市湯舟と接します。

中央の山中にある太子堂や誓蓮寺の山号が聖徳山であるように、聖徳太子との関わりが強い地域です。中世は馬杉荘に属していました。江戸時代の剣法無外流祖の辻月丹は馬杉に生まれ、油日神社に誓いを立て江戸で極めました。境内には辻月丹の顕彰碑や寄贈の石灯籠があります。甲賀と伊賀との境界に位置します。この地には中世の山城が多く点在する他忍者の伝説も残ります。



甲南町一の大杉の前で、上馬杉の次代を担う子供達

餅つき 老若男女が交流します

聖徳太子と上馬杉

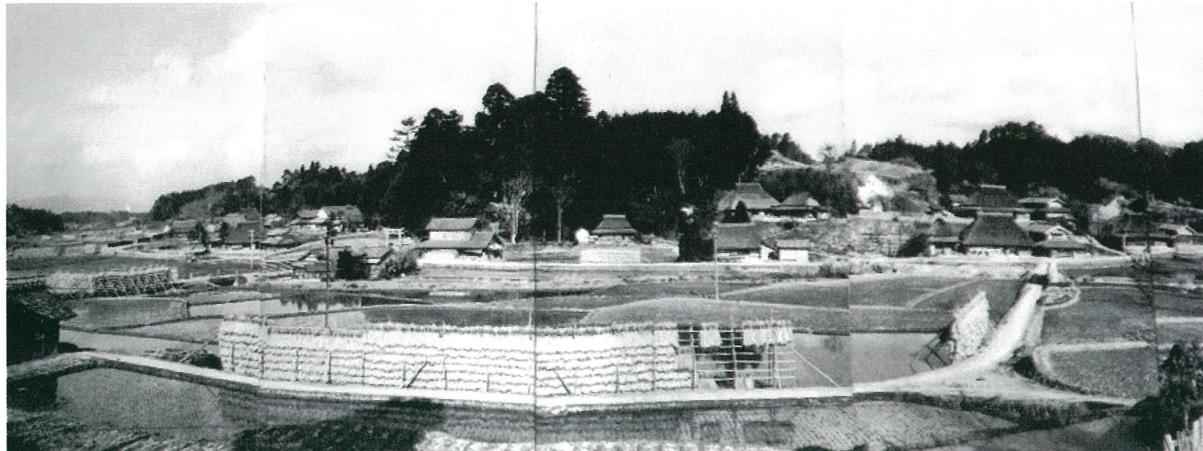


〈「甲賀由緒概史略・馬杉村太子山の事」要約〉

飛鳥時代、国づくりの方針を巡り、聖徳太子は物部守屋と戦いました。

太子勢は大勢の守屋軍に攻められ、伊賀から杉原村（今の馬杉）まで逃げてきました。太子難儀の折り、杉原村の斎入が忍術の隠奥の術を使って馬を隠し、太子を染井谷という隠れ谷に隠しました。追いかけてきた守屋勢は一斉に樹木の茂りへ無数の矢を射込んで引き揚げました。太子の乗ってきた馬はなんと無傷で繋がっていました。斎入は太子を自宅に案内する際、太子は油日岳に向かって、守屋征伐の祈りをしました。太子は「ここは何と云う所か」と聞くので、斎入は「ここは近江上野郡杉原村です」と答えると、太子は「大変世話になった。これからは馬杉という家名にしなさい」と言い、村の名前も馬杉村となりました。そして上馬杉村・中馬杉村・下馬杉村・上野川村・下野川村・伊賀の国の内保村・上池田村・下池田村・瀧池村も馬杉荘とされました。聖徳大使が遂に守屋を退けた時を記念して郡の名を甲賀（かぶとよろこぶ）郡と改められました。

上馬杉



晩秋の景色（圃場整備前）



絵地図は年代不詳ですが明治頃かと思います。今も呼んでいる地名があって面白いと思います。

地名一覧

大谷 南谷 尾山 小谷 ノベダ
井ノ谷 柳谷 ヨノ木谷
ヒヤケ谷 ゲンジャウ (ゲンジョウ)
ハリマ ハサマ谷 ジソウ谷
タケジ谷 ヲカノ下 北谷
奥ノ城 北ガイト 梅木谷 六堂
クツガ谷 五ノ谷 白ハセ
クモ宮 大坂 ウバガ谷 若宮谷
コジキ谷 アト谷 山ノ瀬
シャブ (ショウブ) フロノ谷
花谷 キジ谷 西トウゲ
小坂谷 天王前 上北谷 ダダボウシ 等が読み取れます。
他にも読み取りにくい地名があります。

「古城の記」(馬杉開田家文書より)

世は信長全盛の時代、馬杉村は開田氏の統治で平和な日常であった。或る時、家臣小目山が山の事で不満があり、開田氏の尾崎城に鉄砲を撃って出奔し伊賀の藤山氏に匿われた。開田氏は方便を以て馬杉村に小目山を呼び出して捕らえました。これに怒った藤山は伊賀勢を率いて開田の城を夜襲しました。開田重三郎は防ぎきれず戦死しました。劣勢になった重三郎の父開田敏興は下屋敷へ引き下がる。藤山勢が遂に城を乗っ取りました。その時、開田が合図の早鐘を鳴らすと、同名中の友人滝同名の士150騎が応援に駆け付けました。なかなか挽回できず手をこまねいていたところを開田の臣西田と杉田が城を奪還しました。滝氏の次男が開田氏を継ぎました。
*永禄年間に開田氏は滝同名中の仲間となっています。



黄金の稻穂（圃場整備後）



郷土が生んだ偉大な剣豪

江戸時代の剣豪　辻月丹は慶安元年(1648)近江国甲賀郡馬杉村の郷土の二男として生まれ、山口流の剣法を学び、諸国を武者修行し江戸において道場(麹町9丁目にあったと云われています)を開きました。

当代随一の師範と称され、門人は3千人にも及び、その後無外流を開いたとあります。物欲にとらわれず、妻子なく、髪はボサボサ、衣服はよれよれで、外見は乞食と変わらなかったと云われています。しかも容貌魁偉なため、賊でも出会っただけで逃げ出したといいます。

油日神社の境内には、昭和43年に建立された「無外流兵法祖 剣聖辻月丹資茂生誕ノ地」の石碑があり、また辻月丹が奉納したとされる石灯籠もあります。

この生誕の地で、門人たちによる無外流居合兵道奉納演武大会が昭和43年から3年毎に開かれ、堺や和歌山、高槻など各地から多くの剣士と共に交流が続いている。

昭和43年秋 吉日 除幕式

祇園祭

(柑子・下馬杉・上馬杉)

祇
園
祭



柑子の花奪 制作と祇園祭の様子



祇園祭



[祇園祭] 下馬杉・上馬杉の様子

花鉾に太鼓踊り、構成は鼓が一名で、太鼓が六名ですが全員揃うのは困難で近年は女子が大活躍しています。踊り自体は、横跳びするような単純な踊りですが、猛暑の中で重い桶太鼓を首から吊るして花笠を被って踊るのは、保育園児～小学生には大変です。



宮地区自治振興会10年の歩み



宮地区自治振興会は設立以来10年が経ちました。

自治振興会の設立には、当時の区長を始め、宮活性化協議会と宮活性化委員会も加わり、組織や事業について何度も会議を重ね誕生しました。なかでも設立寸前に起きた「東日本大震災」の脅威は、自治振興会の役割についての議論に大きな課題となりました。

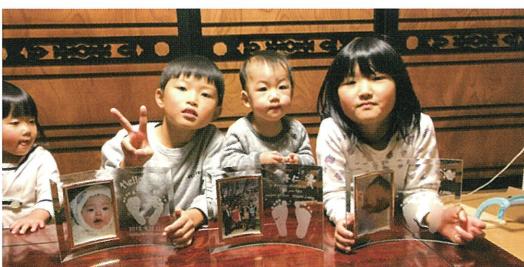
平成23年(2011)4月30日に設立総会を開催し、「宮地区自治振興会」の名称や規約の承認、役員と当年度の事業計画及び予算を決定しました。

初代会長は西本恵一氏(下馬杉)に決まり以後4年間勤めて頂きました。

又大きな事業として、子ども会研修旅行、第三学区運動会、忍にん寄席、わくわくフェアの開催を中心に事業展開することになりました。

広報「あさのがわ」の創刊号は5月20日に発行し、設立総会の内容や、事業と予算、組織や役員名簿と共に、子ども会研修旅行で関西サイクルスポーツセンターでの楽しそうな子ども達の写真を掲載していました。

令和2年1月号まで45回発行しました。広報「あさのがわ」を頼りに、自治振興会の10年をひもといて行きたいと思います。



This image is a collage of several photographs from the 'Asagawa Children's Camp' event. It includes a large indoor hall with tables and chairs, a stage area with a microphone stand, a blue bus with cartoon characters, and children playing at a table. The photos are arranged in a non-linear, overlapping manner across the page.

平成23年(2011)10月号
には「宮地区まちづくり計
画」が大きく掲載していま
す。

「宮地区まちづくり計画」は自治振興会が地域の課題や、地域の良さを生かした事業を展開するために重要な指針となるべき計画です。

平成24年(2012)10月号には「宮のお宝事業」のことが書かれています。今もお誕生を祝して記念品を贈っていますが、この事業は2年目から始めましたが、自治振興会の設立後に生まれた10名の赤ちゃんにもお渡しました。

平成25年(2013)7月号には、特集として「宮の古き時代を語ってもらおう。」が4ページにわたり掲載されています。長年地域のリーダーとして引っ張って頂いた、昭和2年生まれの大原さん、昭和4年生まれの山川さん、昭和12年生まれの田中さんの3人の大先輩に戦前戦後の宮の様子を熱く語って頂きました。軍事教育の厳しさや、物と人が減っていく寂しさなどを聞かせてもらいました。運動会では賞品が出たことや校長先生のバイクに憧れた子どもらしい話の他、子どもでも社会の一員としての自覚があり家や地域での貴重な労力とて位置づけられていたことなど理解することができました。



夏の特集 宮の古き時代を語つてもらおう。

宮地区自治振興会は、宮の古き時代を語つてもらおう。と題して、昭和2年生まれの大原さん、昭和4年生まれの山川さん、昭和12年生まれの田中さんの3人の大先輩に、戦前戦後の宮の様子を熱く語って頂きました。軍事教育の厳しさや、物と人が減っていく寂しさなどを聞かせてもらいました。運動会では賞品が出たことや校長先生のバイクに憧れた子どもらしい話の他、子どもでも社会の一員としての自覚があり家や地域での貴重な労力とて位置づけられていたことなど理解することができました。

対談の様子と記事



岡田先生(滋賀県立大講師)の講演

平成26年(2014)8月号には土山の山内自治振興会との意見交換会が掲載されています。この後、山内自治振興会とは地域作りの面での交流が続いていきます。11月のファミリーウォークには特製「鹿カレー」を提供して頂いたり、地域おこし協力隊を同時期に受け入れることになったので、情報交換も密に行われました。平成17年(2017)には山内のやまびこ文化祭に宮から餅つきなどで参加、山内からも「わくわくフェア」に参加してくれました。



山内文化祭で餅つきをする。柑子の皆さん



平成16年(2016)1月号には、自治振興会では5回目となる忍にん寄席が開催されました。柑子公民館にて桂坊枝、桂梅團治、露の瑞の3人4席の落語会の様子が掲載されていました。地域の落語会を引き継ぎ、自治振興会でも継続的に開催してきました。

平成27年（2015）6月号には27年度の総会について掲載されています。前理事の多くが4年間の任期により交代しました。2代目会長には森田則久氏（上馬杉）が就任しました。

平成26年（2014）6月号には、1月より来てくれた地域おこし協力隊、田中啓介さんの取り組みが紹介されています。地域内にひまわり畑を作り、収穫した種から「ひまわり油」の採取を試みています。他にもニホンミツバチや竹炭など、地域の特産づくりに情熱を持って取り組んでくれましたが、残念ながら志半ばで3年の任期を終えてしまいました。



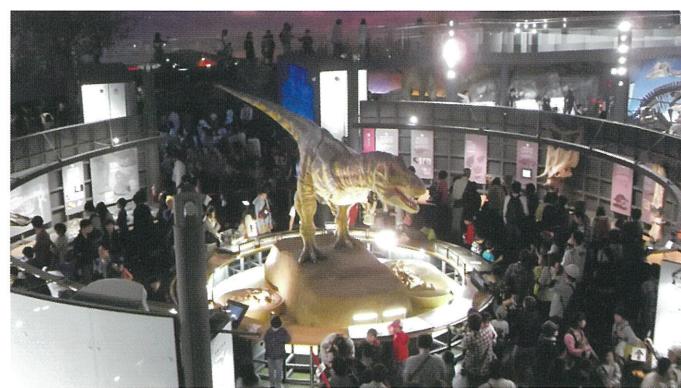
2019 甲賀市甲賀町忍者の里ウォーク



2015 伊賀市「モクモクファーム」を訪ねて

平成27年（2015）にはファミリーウォークの様子が掲載されています。平成25年から始まったこの事業も3回目です。地域内の名所や歴史的な場所を巡るウォーキングから、地域内外の歴史的な場所や防災などの目的を持ったウォーキングです。

第三学区運動会は第三小学校の新運動場ができるとき以来続く地域と学校で作る運動会です。地域が一体になって競い合い、笑いあい、大人にも子どもにも大声援で応援する、宮地区最大の行事です。少子化が言われるなかいつまでも続けたい事業です。



子ども会研修旅行は、昭和30年代から続く子ども達が楽しみにしている行事です、以前は民生委員、児童委員が計画し区が協力する形の事業でしたが、自治振興会が発足してからは自治振興会と子ども会役員を中心に計画実施しています。



令和元年の1月号に掲載されている、わくわくフェアは平成17年（2005）に宮活性化協議会が開催して以来15年続く事業です。当時はまだJA宮支所が存在したので合同で開催しました。当時から地域の作物や加工品の販売と子ども達の作品展示や地域の人の発表の場としても定着しました。お正月用品やミカンや卵の販売とソバや焼きそば、唐揚げなどのお店やつきたてのモチが振る舞われるなど、地域に定着した催しになりました。



第三小学校草刈りボランティア



飛び出し坊や設置事業



獣害対策研修



防災研修（防災倉庫）



フラワーアレンジメント教室



他にも農業支援として、獣害対策・特産品・6次化産業などの研修や講習会などの開催。防災面では、防災井戸・防災品の再点検と購入・防犯灯のLED化・防災研修などの事業も推進しているところです。女性理事からの提案事業として、お正月に飾るフラワーアレンジメント教室も事業化しました。

令和元年（2019）6月号には、定期総会に於いて組織の2部会制や任期3年の変更の承認と、新理事と役員の紹介が掲載されています。4年勤めて頂いた森田則久氏から新会長 中野和彦氏（上野川）へバトンが渡されました。

そして令和2年度（2020）は、新型コロナウィルスの感染拡大のため、定期総会も書面決議で終えたほか、全ての事業を開催することができませんでした。長年欠かさず続いた事業を残念ながら継続することができませんでしたが、各区の防災設備の充実や、各戸へのマスク配布等を行いました。



発電機（カセットボンベ対応）

令和3年（2021）「ふるさと宮」を出版、全戸配布

懐かしい言葉

使われなくなりつある言葉

でぼけ	奉仕作業
ゆい	仕事をお互いに協力し合うこと、労力交換
すにんこ	古琵琶湖の湖底に堆積した泥の塊
たんぼ	水溜
しようず	湧き水
どっこんしょ	自噴水
くまし	田の客土にする為、草や堆肥、土を交互に積み上げたもの
すえもんじ	野菜の芽出しご用苗床
はさ	稻や藁を掛けておく木組み、稲架
すずき	乾燥・保存のため藁束を円錐形に積み上げたもの
くわがしら	農家の中心的働き手
ほっかぶり	防護、防塵のため手拭いで頭や顔を覆うこと
こんばんてん	藍染の半纏 } (野良着)
こんばっち	藍染の股引き } 上下

はばけ	水田農作業用すね当て脚絆
べべ	着物
でんち	袖無しの綿入れ
こびる	農作業時の休息に食べる簡単な食事
まま	ご飯
てしょ	お皿
はんぱ	寿司をつくったりする浅い桶、飯盛り
えんね	縁側
あがりと	玄関にある部屋への上がる口
せんち	便所
ばんどこ	夜具を温める炬燵
あんぜる	心配する
いぬ	帰る
きしな	来る途中
いきしな	行く途中
にくずらい	小憎らしい
へちこち	あべこべ

へんねし	ねたむ、すねる
といらい	大きい
おいねる	背負う
だるくさい	つまらぬ、馬鹿らしい
うたてい	不快、情けない
せんどする	あきあきする
すごい	するい
だんない	かまわない
なりやい	いいかけん
またい	にぶい、不器用
ひだるい	ひもじい
のどほり	御馳走になる
ござる	来られる
けなるい	うらやましい
ほどらい	およそ
うら	自分、私
そらはや	それはそれは
それこされ	なるほどそうだ
ようそうやろぞ	どういたしまして
もうかい	そのうちに

昔の言葉

昭年40年頃まで日常の会話で使っておられました、話の内容が解りますか？昔を思い出して話してみると面白く楽しいですよ、皆さんもどうぞ昔の言葉を使って話してみてはいかがでしょう。

- ・あー喉が渴いたしようずの水飲んでこう
- ・今日は田にクマシ持ちするで
- ・野菜の種をまいて苗を育てるすえもんじをつくるわ
- ・稻刈り前にはさ作りせなあかん
- ・子供のころすずきに飛び乗ってよう怒られた
- ・寒いなー今日はほっかむりして仕事しよう
- ・仕事に行くで、こんばっちとこんばんてん用意してくれ
- ・正月にベベ貰うてもるた
- ・風邪ひいたらあかんででんち着なあかんで
- ・腹へったでこびるにしよう
- ・おかあちゃんままおくれ
- ・おかず入れるてしょとって
- ・まあようきてくれたなあ～えんねで一服していけや
- ・腹の調子が悪いでせんちかしてくれ

- ・寒いでばんどこ入れてや
- ・子供が風邪ひいて熱があるしあんぜるわ
- ・あんたはようへちこち着る子やなあ
- ・あいつはにくずらい奴や
- ・小さい子供おいねてるわ
- ・○○はすこいやつや
- ・○○はまたいしなりやいなやつや
- ・だんないだんない気にせんでええ
- ・祭りで親戚の人がぎょうさんござった
- ・あの子はいつも良いもの着てるしけなるいな～
- ・うらの家は冬は寒うてかなわんわ
- ・もうかい来るやろうでちょっと待ってて
- ・それこされあんたの言うとうりやなあ～
- ・いつもひだるい思いしてかなんわ

宮村役場



上野川にあった宮村役場は、小学校へ行く道筋にありました。

数十メートル間に、農協の事務所、駐在所、お茶工場等宮の中心地ビジネス街でした。

歴史年表

時代	年号	西暦	甲賀・宮のできごと	年号	西暦	世の中のできごと
飛鳥	天武天皇1	672	甲賀が壬申の乱の戦場になる	用明天皇2 推古天皇12 大化1 天智天皇6	587 604 645 667	聖徳太子と物部守屋の戦い 聖徳太子が十七条憲法定める 大化の改新(天皇を中心とした国作り始まる) 大津京が都になる
奈良	養老1 天平14 延暦1	717 742 782	柑子の円通寺行基により開基 紫香楽宮造営始まるが745年末完成で廢止 柑子の櫻神社創祀	和銅3 延暦1	710 782	平城京(奈良)に都が移される 大津坂本の日吉神社分霊を奉祀
平安	大同1 寛平4 天元4 長久1 治承4	806 892 981 1040 1180	伊勢廻寺 創建 望月三郎兼家甲賀の地を領す 上馬杉油日神社橘朝臣敏保により創祀 橘朝臣敏正上馬杉、下馬杉を領す 甲賀で源平合戦が起こる	延暦13 天喜1 文治1	794 1053 1185	平安京(京都)に都が移される 平等院鳳凰堂ができる 源頼朝が鎌倉幕府をひらく
鎌倉	嘉暦2	1327	池原荘柑子村地頭代延命五郎が内保へ乱入した			
室町	延元2 正平12 応永17 文明12 長享1 延徳2 大永5 弘治1	1337 1357 1410 1480 1487 1490 1525 1555	南北朝の内乱で甲賀も戦場になり望月氏も参戦した 山中道俊柑子の地頭職となる 土豪福井氏により野川に福泉寺が建立 望月氏が柑子に望月城(青木城)を築く 甲賀の望月氏などが足利義尚将軍に対抗 馬杉丹後守が安芸巖島神社の分霊を勧請し奉祀、嶋神社となる 馬杉氏が湯舟の伊室氏に攻められる 開田氏が4代目伊室氏に攻められる	長享1 延徳1 天正1	1487 1489 1573	長享の乱(足利將軍が近江に侵攻) 足利義政が銀閣寺を建てる 織田信長が室町幕府をほろぼす
安土桃山	天正8 天正13	1580 1585	開田氏が湯舟の藤山氏に攻められる 宮の各村が水口岡山城の支配下になる	天正10 天正13 天正18 慶長5	1582 1585 1590 1600	甲賀者、信長軍として伊賀に侵攻した 甲賀ゆれで甲賀者の領地を没収した 豊臣秀吉が全国を統一する 関ヶ原の戦い
江戸	元和4 正保4 元禄11 宝永5 正徳3 正徳4	1618 1647 1698 1708 1713 1714	宮村全体が幕府代官山岡領になる 山口但馬守の支配となる 柑子が旗本内藤氏領となる 野川が宮川藩堀田氏領となる 馬杉が旗本内藤氏領となる 崇福寺が創立される 野川日吉神社社殿を再造される(創祀年代不詳) 辻月丹が油日神社に灯籠一对を寄進する 伊勢廻寺が再建される 福龍寺僧貞応により中興	寛永15 文政4 天保8 天保13	1638 1821 1837 1842	島原の乱鎮圧に甲賀忍者が出向く 伊能忠敬が日本地図を完成させる 大塩平八郎の乱起こる 天保義民一揆起こる(宮からも参加)

時代	年号	西暦	甲賀・宮のできごと	年号	西暦	世の中のできごと
明治	5	1872	甲賀郡は滋賀県に編入		8	1875 地租の金納化(土地価格の3%)
	7	1874	闡明学校開校(野川・柑子)			
	8	1875	開新学校開校(上馬杉・下馬杉)		10	1877 西南戦争始まる
	14	1881	私立開田医院開業		18	1885 伊藤博文が初代内閣総理大臣になる
	18	1885	柑子・野川・下馬杉・上馬杉が一行政区画			
	22	1889	町村制施行により宮村となる		22	1889 草津、三雲間鉄道開通
	27	1894	宮村が大旱魃に遭う		22	1889 大日本帝国憲法が発布される
	28	1895	私立望月医院開業		23	1890 三雲・柘植間開通(深川駅、柘植駅開業)
	31	1898	宮村青年会、婦人会結成		27	1894 日清戦争勃発
	41	1908	上野川常夜燈建立 宮尋常小学校新校舎完成		33	1900 近江鉄道開通 公立深川病院創立
	42	1909	宮村信用販売購買組合設立		37	1904 日露戦争勃発
	43	1910	宮村村は編集される		39	1906 関西鉄道(草津線)が国有鉄道に編入
大正	3	1914	初めて電灯が点灯する		3	1914 第一次世界大戦勃発
	4	1915	宮実業補習学校開設		12	1923 関東大震災
昭和	7	1932	経済厚生運動の指定村として宮村再建方策発表 模範村として全国から視察多数 模範村『滋賀の宮村』活動資料発刊		3	1928 普通選挙制度初の衆議院選挙
	9	1934	各区に電話設置(地元と農協で費用折半)		12	1937 満州事変
	16	1941	宮尋常小学校が宮国民学校になる		13	1938 国家総動員法布告
	17	1942	上馬杉岡ノ下池完成		14	1939 第二次世界大戦勃発
	18	1943	町村合併により甲南町となる		16	1941 太平洋戦争勃発
	19	1944	町国民健康保険組合結成		20	1945 広島、長崎に原子爆弾が落とされる
	23	1948	甲南町立甲南中学校となる 下野川神出池完成		20	1945 終戦になった
	25	1950	柑子集会所(現在の社務所)新築		21	1946 農地解放
	27	1952	県立甲南高等学校と改称		34	伊勢湾台風直撃
	29	1954	上馬杉柳谷池完成			
	30	1955	滋賀交通バス 寺庄、上野川線運行		35	1960 寺庄駅開業 町立甲南病院開業(1964民営化~)
	35	1960	団体加入電話開通		39	1964 東京オリンピック開催
	38	1963	農業構造改善事業始まる(柑子・野川)		39	1964 東海道新幹線開通
	42	1967	県道が舗装される		42	1967 びわこ大博覧会開催
	43	1968	無外流居合兵道振興会が油日神社で演武を奉納			

時代	年号	西暦	甲賀・宮のできごと	年号	西暦	世の中のできごと
昭和	45	1970	電話が自動化	45	1970	大阪万国博覧会開催
	46	1971	簡易水道工事・東海自然歩道完成 第1次柑子工場団地起工 上野川常夜燈県道拡幅のため移転	47	1972	沖縄が日本に返還されて沖縄県になる
	48	1973	金方堂松本工業、近畿研磨剤工業、天馬合成樹脂などの会社が創業開始	50	1975	草津線電化工事起工
	49	1974	第三小学校グラウンド竣工			
	52	1977	広域農道竣工			
	54	1979	甲南第三小学校新校舎竣工 町道池田野川線工事 下野川草の根ハウス竣工 下馬杉集会所完成 上野川公民館・広場竣工	55	1980	草津線電化開通
	55	1980	柑子地区圃場整備、河川改修完成	62	1987	国鉄分割民営化により草津線がJR西日本の経営となる
	56	1981	下野川テレビ共同受信施設竣工			
	57	1982	下野川に町営住宅10戸建設 県道柑子バイパス完成 野川診療所完成			
	62	1987	野川下馬杉地区圃場整備、河川改修完成 福泉寺庫裏改築			
平成	元	1989	上馬杉地区圃場整備、河川改修完成			
	2	1990	宮地区 集落排水事業着工	3	1991	ふれあいの館完成(小学校の講堂移築)
	3	1991	甲南第三小学校体育館竣工	5	1993	甲南町新庁舎竣工
	5	1993	県道下野川地先拡幅計画	7	1995	阪神淡路大震災
	6	1994	宮農村集落排水工事整備			
	7	1995	日吉神社境内鳥居移転			
	12	2000	甲南フロンティアパーク造成開始(柑子)	20	2008	新名神高速道路開通
	13	2001	甲賀広域斎場供用開始	22	2010	寺庄駅新駅舎が完成運用
	16	2004	甲賀市となる	23	2011	東日本大震災
	17	2005	甲南フロンティアパーク稼働(柑子)			
	18	2006	第三小学校新プール開き			
令和	23	2011	宮地区自治振興会設立			
	26	2014	甲賀農協各支所廃止し甲南支所に統合			
	27	2015	上野川阿弥陀寺本堂・庫裏竣工 石碑移転			
	28	2016	(株)あいコムこうかが音声放送開始			
	1	2019	甲賀・阿山線拡幅工事開始(完成2024年)	2	2020	新型コロナウイルスが世界に蔓延してパンデミックになる 世界経済マイナス成長になる 東京オリンピックが1年延期(2021年)になる
	2	2020	新型コロナウイルス日本でも蔓延した 非常事態宣言発出・人との接触8割減 失業者、企業の入社取り消しがあった 学校がすべて休校になる 飲食店、土産店、市役所の一部休止 宮自治振興会 ふるさと宮 発刊			

あとがき

平成から令和。そして、新型コロナウイルスの流行でリモート企業活動や私達の日常生活も「新しい生活様式」へと時代が大きく変わろうとしています。一昔前、昭和は遠くなつたという言葉をよく耳にしました。誰もが懐かしんだり、郷愁に慕っている時季ではないかもしれません、地域の心の財産や誇れるものはしっかりと共有しなければならないと思います。

宮地区には、多くの文化財や地域にまつわる歴史や謂れ、諸行事など有形・無形を問わず、将来にわたって残しておきたい、また宮地区として誇れるものが様々な形で沢山あると思います。そんな一部を皆さんに知って頂けるよう『ふるさと宮』を発刊致しました。この事業の提案があってから足かけ5年ほどの歳月があり、それぞれの時々に携わって頂いた編集委員の皆さんには大変なご苦労をおかけしました。また、貴重なお話やご助言そして資料や写真提供を頂いた皆さんにも改めて御礼申し上げます。

この『ふるさと宮』が子ども達にも読まれ、家庭の中でもひとつの話題となり、新しい時代への橋渡しとなれば幸いです。

令和3年2月



〔ふるさと宮の編集に関わっていただいた方々〕

伊藤 暁雄／岩田 孝晴／奥島 啓司／北田 政博／北田 良三／木下 一／杉田 利正／田中 明
田中 清仁／田中 義人／辻 喜代司／中野 和彦／西田 淳／塗矢 昭夫／塗矢 純司／橋本 博光
藤田 吉宏／増田 順一／望月 正人／森田 則久／山川 清治／山口 秀男／山口 真典

〔参考資料〕

しがらきの民具　　ふるさと再発見大原　　甲賀市史　　わたしたちの甲賀市
甲南町街角通信　　夢未来まちづくり上馬杉　　上野川の歴史と移り変わり
明治・模範村『宮村』の人と水　　伊賀の風景　　甲南町30年のあゆみ
甲南町教育百年のあゆみ　　甲南町20世紀のあゆみ　　甲南町史　　他

昭和初期の風景などを取り入れて昔の生活を纏めようと考えましたが、カメラのない時代でしたから、学区民の皆様から当時の写真を提供して頂くのが難しく、やむをえず参考資料などから部分掲載させていただきました。



1980年代の上野川上空写真



2010年代の上野川上空写真

ふるさと 宮

2021年2月 発刊
発行／宮地区自治振興会
〒520-3305 滋賀県甲賀市甲南町野川818
甲南第三地域市民センター内
企画・編集／『ふるさと 宮』編集委員会
印刷／株式会社スマイ印刷



宮地区自治振興会

